



特別史跡 一乘谷朝倉氏遺跡 XVII

昭和60年度
発掘調査
整備事業概報

福井県立朝倉氏遺跡資料館

はじめに

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査、環境整備事業は順調に進捗していますが、昭和60年度の発掘調査は昨年度に引きつずき隣接した城戸ノ内町吉野本地係で実施しました。公園センターから八地谷入口にかけての城戸ノ内中央部、一乗谷川西側一帯の調査は、一応今回で終了することにしました。

本年度の調査では、庭を持った武家屋敷や備蓄銭を埋蔵した武家屋敷、また数多くの小規模な町屋跡、山沿いに配置された南北方向の幹線道路などが検出され、戦国城下町の構造を解明するための貴重な資料がさらに蓄積されました。遺物では青白磁や白磁などの中国製陶磁器片が多量に出土しましたが、これまでの資料の不足をカバーし、新たな成果が得られるものと存じます。また備蓄銭や俵や打出の小槌などの招福の絵柄が描かれた杓子、冊子本の医学書であったと思われる焼紙の断片などからは、往時の人々の生活が生々しくしのばれるのであります。

環境整備は、これまでと同じような手法で第46次発掘調査で検出した武家屋敷や町屋道路の跡を露出展示整備しました。また館跡の従来の金属製説明板を木製説明板に変えるとともに、復原武家屋敷にも説明板を設置、見学者の便宜をはかりました。

おわりになりましたが、事業の実施にあたり、種々ご指導、ご援助をいただきました文化庁、朝倉氏遺跡調査研究協議会、福井市教育委員会などの関係各位、ならびに城戸ノ内町をはじめとする地元の皆様に心から感謝申し上げる次第でございます。

昭和61年3月

朝倉氏遺跡資料館長 藤原武二

目 次

はじめに

第 51 次 調 査

発掘された遺構…………… 1

発掘された遺物…………… 5

第 52 次 調 査

発掘された遺構…………… 10

発掘された遺物…………… 13

第46次調査区整備工…………… 19

P L . 1 カラー写真

P L . 2 ~ P L . 6 第51次調査・遺構

P L . 7 ~ P L . 12 第51次調査・遺物

P L . 13 ~ P L . 18 第52次調査・遺構

P L . 19 ~ P L . 24 第52次調査・遺物

P L . 25 ~ P L . 28 第46次調査区整備工

第 1 図 発掘調査・環境整備位置図

第 2 図 第51・52次調査遺構全測図

第3図~6図 第51次調査・遺構

第7図~11図 第51次調査・遺物

第12図・13図 第52次調査・遺構

第14図~18図 第52次調査・遺物

第19図~21図 第46次調査区整備工

挿図1 第51次調査区略図

挿図2 調査区模式図(旧地形との比較)

挿図3 青白磁梅瓶出土分布

挿図4 青磁壺出土分布

挿図5 青磁刻花文盤出土分布

挿図6 天目瓶出土分布

挿図7 第52次調査区略図

挿図8 備蓄銭出土状況

表 1 中国製陶磁器層位別分布状況

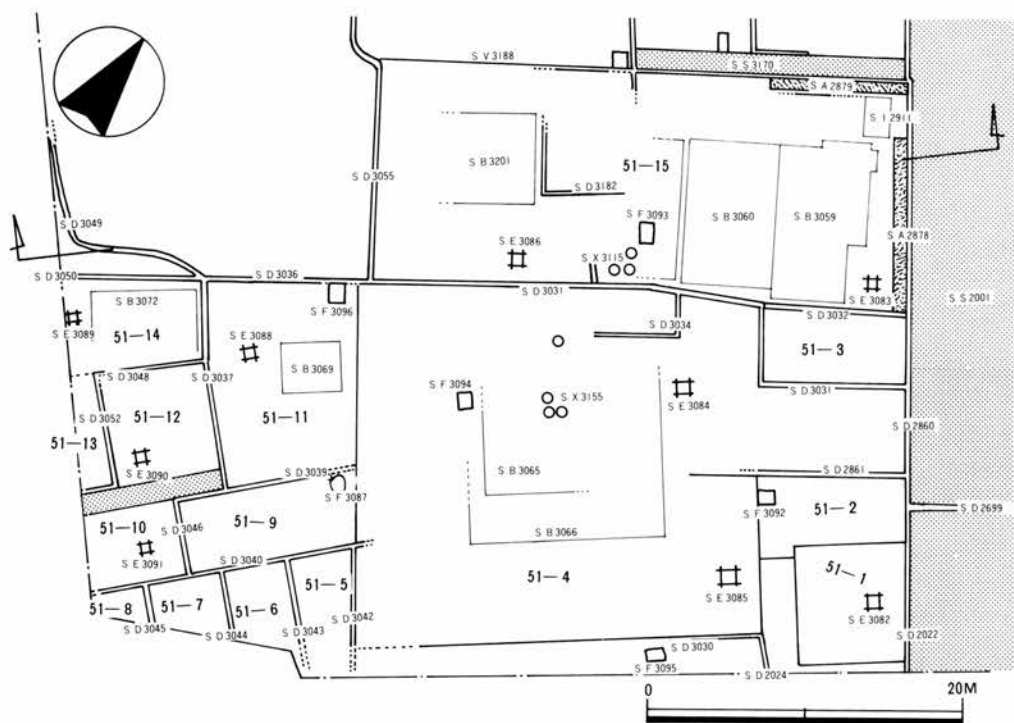
表 2 備蓄銭内訳

表 3 第52次調査遺物一覧表

第 51 次 調 査

第51次調査は、福井市城戸ノ内町吉野本地籍の東南部、約1720m²を対象に実施した。調査区の北は第49次調査地、東は第36次調査地に接しており、西は今年度後半期に調査した第52次調査地となっている。この地区一帯は、第52次調査をもって一応過去7年間のまとめとなる予定であるが、合計約2万平方メートルの面的な調査によって、多くの成果が上げられた所といえよう。その1つは、4本の東西・南北方向の主要幹線道路が検出されたことによって、町割が整然と実施されており戦国城下町の都市プランが把握された点である。第2には、西の山際に沿って寺院跡3、武家屋敷跡6が検出され、一乗谷川沿いの道路に面して町屋跡が98以上も検出できた点である。寺院跡では、土塁をめぐらした中規模程度の寺院や、墓地と柿経の束を埋納した寺院などがみつかっており、町屋跡の中には、紺屋・鋳物師・数珠師・檜物師などの職種の種類がわかる家屋もみつかっている。戦国城下町における寺院・武家屋敷・町屋の配置の在り方や、個々の具体的な様子がかかなり判明してきたといえよう。

今回の調査は、この地区が寺院集中から武家屋敷集中へ徐々に移行していく過程を明らかにする目的をもって、昭和60年4月1日から8月3日まで実施し、その後補足トレンチ調査と、11月7日のヘリコプターによる空中写真測量による遺構平面図の成果をえて全てを終了した。



挿図-1 第51次調査区略図

発掘された遺構（P L. 2～6，第1～6図）

第51次調査区は、大きくみて3つの区画から構成されている。第1区は、51-1～51-4で、面積約830㎡を有している。南辺は後世の削平で不明な点が多いが、段差の附近とすれば、道路 S S 2001、溝 S D 2860、3030、3031などで区画されており、武家屋敷と考えられる。そのうち道路に面した51-1・2は、最終時期に町屋になっていたものと推定された。第2区は、51-5～51-14で、面積約410㎡の中に町屋が10軒程度集住している様子が検出できた。各町屋は、狭い溝で区画されている。第3区は、51-15で、面積約480㎡を有している。武家屋敷と考えられ、道路 S S 2001、溝 S D 2860・2862・3031・3035で区画されている。道路に面した部分には、土塁 S A 2878を設けており、最終時期には51-3の区画もとり入れて敷地を拡張している（挿図-1）。

検出した主な遺構は、道路2、溝22、土塁1、礎石建物28、掘立柱建物1、井戸9、石積施設6、埋襲遺構3などであった。ここでは、まず区画割に関する道路や溝、石列などについて解説し、つぎに、各区画ごとにその主要な遺構について述べていくことにする。なお、方位は説明の都合上、東北方向を北として記述を行なった。

S S 2001 この東西道路は、第49次調査ですでに検出され、報告済のものである。この道路は、武家屋敷街を結ぶ主要幹道であり、町割施工時の基準にもなったものであろう。

S S 3097 この道路は、町屋の間を通る幅1.3mの袋小路であり、両側には石を並べ砂利を敷いている。51-9・10・11・12の町屋へは、この小路がなければ入れないことから、生活道路として欠くことのできないものである。なお、道路より1m東側の下層からも、石列と砂利敷面が検出され、嵩上げによる道路の改変のあったことが知られた。

S S 3170 この道路は、S S 2001にとり付いた幅約1mの狭いもので、石積施設 S F 3196の所で行きどまりになっている。52-6の敷地へ入る専用の袋小路と考えられるが、51-15の敷地にも通じていたようである。51-15には、表門と考えられる S I 2911が存在しているが、他に門または入口と考えられる S X 3232が検出されていることや、土塁 S A 2879が途中で切れていることなどから、通用口 S X 3232にとり付く道路の機能も有していたものと思われる。

S D 2862 この溝は、道路 S S 3170の側溝であり、S D 3176に接続し、S D 2860に注いでいる。石段 S V 3188と、この S D 2862とで、51-15の敷地が限られている。

S D 3031 この溝は、S D 3050・3036・3031・3032と直線的に流れ、S D 2860に注いでいる。しかし、最終時期には、石積施設 S F 3096が設けられたり、S D 3032が埋められたりしたため、S D 3055、3031と流路は矩折れ状に変更されている。

S D 3040 この溝は、町屋を限る溝で S D 3042・3043・3044・3045・3046などの町屋区画を示す溝がとり付いている。南から北へ流れていたようであるが、削平のため行先は不明である。

51-1 道路 S S 2001に面して地口7.6m、奥行7mの敷地をもっている。西辺・南辺は石列で画されており、とくに南辺の幅約2.2mの空地は、石が多くよく分からなかったが溝や通路状の遺構が検出された。敷地内には、一面に砂利がみられ、掘立柱建物 S B 3157が検出できた。南北4.73m (2.5間) × 東西2.9m (1.5間) 分が確認され、北寄り中央部には井戸 S E 3082が位置している。下層は、黄色土と炭層とが薄く互層をなしており、床面数を把握することは困難であった。東よりの所で礎石建物 S B 3055の礎石1個が検出できたが、周囲に鉢巻状に石がめぐっていた。

51-2 道路 S S 2001に面した地口4m、奥行約10mの敷地をもつ町屋である。入口附近は、溝 S D 2022・2699・2860が位置している。上層では、掘立柱建物 S B 3056、石積施設 S F 3092、礎石建物 S B 3057が検出された。S B 3057は、4.72m (2.5間) 分のみが残存していた。

51-3 地口4.3m、奥行9mの敷地をもつ。溝 S D 3031に伴う上層面は、黄色土の整地面のみで遺構は全く認められなかった。下層では、溝 S D 3032と礎石建物 S B 3058が検出された。S D 3032は、51-15の武家屋敷を拡張する際、整地土で埋められたものと思われる。S B 3058は、東西約3m (1.5間) × 南北5m (2.5間) 分が検出できた。

51-4 この武家屋敷は、当初、道路 S S 2001に面して地口を有していたものと思われるが、後に、町屋51-1・2と、武家屋敷51-15の拡張部51-3とによって侵蝕され、東西・南北とも約23m四方の敷地になったものと考えられる。その結果、51-2と3の間の幅約5mの部分は、この屋敷に入る通路として、固く叩きしめられた砂利が敷かれていた。敷地西寄りには、井戸 S E 3084、石積施設 S F 3094、東北隅には、井戸 S E 3085が位置している。敷地の中央部には、東西9.92m (5.25間) × 南北7.56m (4間) の大きな礎石建物 S B 3065が位置しており、とくに、南半分は、固く叩き締った焼土面となっていた。建物の西北部では埋襲遺構 S X 3154・3155が検出された。北側の礎石建物 S B 3064の規模などは不明であるが、この建物と繋っていたものと思われる。東南隅の礎石建物 S B 3066は、S B 3065よりも若干高い面にある。

51-5・6・7・8 溝 S D 3040の東に位置する町屋で、それぞれが、溝 S D 3042~3045で小さく画されている。51-5は、東辺に入口が想定される。地口は4m、奥行は5m分が残存していた。礎石などは検出できなかったが、S B 3078の存在が予想できる。南辺近くで炉跡 S X 3152が確認できた。なお、この区画の北でもう1軒分の町屋が想定できるが、削平が著しい。51-6は、地口4m、奥行は4.5m分が残存していた。黄土や焼土で整地されており、建物遺構 S B 3079の存在は予想されたが、礎石などは検出されなかった。51-7は、地口4.5m、奥行は3m分が残存していた。西北隅には、底に石を敷いた浅い石積施設 S X 3153がみられる。

51-9 溝 S D 3039・3040・3046で限られた、東西4.5m、南北は11.8m分の敷地を有する町屋である。西南隅に入口があり、袋小路 S S 3097がとり付いている。敷地の南半分の所で上層建物 S B 3075、下層建物 S B 3076の根石とみられる石敷群が、合計4ヵ所検出された。根石の周

囲を、越前焼の甕片で仕切っている例もみられた。敷地中央附近には、長径2mのピットがあり、炭がつまっていた。敷地の西北隅には、石積施設S F 3087が検出されたが、楕円形を呈していた。

51-10 溝S D 3040・3046と、袋小路S S 3097とで限られた町屋である。中ほどには井戸S E 3091が位置している。溝肩に礎石らしい石も認められるが、その規模などについては不明である。袋小路S S 3097より東側を掘り下げた際、S S 3097の石列と平行する石列を検出した。砂利が固く叩き締められており、下層の路遺構と思われる。

51-11 溝S D 3036・3037・3039で限られた東西13m、南北は8m分の敷地を有している。袋小路S S 3097の突きあたりには、敷地内の通路と思われる砂利敷S X 3140があり、入口は東南隅にあったものと思われる。敷地の北よりの所には、東西約3.1m、南北約4mの礎石建物S B 3069がある。遺構面には、一面に砂利が敷かれており、雨落溝S D 3038、井戸S E 3088、石積施設S F 3096などを伴っている。下層でも礎石建物S B 3070・3071が存在していたものと思われるが、規模などは不明である。

51-12 溝S D 3037・3048・3052と、路S S 3097とで限られた東西8.2m、南北6.7mの敷地を有している。敷地内には、方形の石列で囲まれた礎石建物S B 3074があり、井戸S E 3090をもつことから、井戸屋形とも考えられた。同時期の礎石建物としては、北辺の溝S D 3037の肩にある一列の礎石が想定できるが、残存状況は極めて悪い。下層では、礎石建物S B 3073が検出された。この礎石の周囲には、根石が鉢巻状に配されていた。

51-14 溝S D 3037・3048・3050で限られた町屋である。東西5.7m、南北は8.5m分が検出された。敷地中央に、棟通りを示す礎石列があり、礎石建物S B 3072が建っていたものと思われる。建物の残存状況は悪く規模などは不明であるが、南端には井戸S E 3089がみられる。

51-15 溝S D 2860・2862・3031・3032・3035で限られた東西14.5m、南北33.7mの敷地を有する武家屋敷である。北辺と、西辺の前半分には土塁S A 2878・2879がみられる。敷地の西北隅には、薬医門S I 2911が開いており、その横には、砂利を敷きつめ巨石を配した庭S G 2914がある。庭内には、巨石を利用して井戸S E 3083が検出できた。敷地は表から14mの所で段となっている。表側には、2棟の礎石建物S B 3059・3060が繋ってある。S B 3059は、東西10.4m、南北6.3mの規模で、東辺、北辺、西辺に庇がみられる。西辺の1.5間の庇は、入口と考えられ、中央に平らな踏石が据えられている。西北隅の庇S X 2923は、庭へ降り立つ所とみられる。S B 3060は、東西9m、南北5.7mの規模で、南へ延びる可能性もある。西に位置するS X 3232は、上層遺構であるが、通路S S 3170から入る門と推定される。敷地奥半分には、大甕埋設遺構S X 3115、木組の上に方形石組をもつS F 3093などの施設をもつ礎石建物S B 3061、その上層建物S B 3062などがあり、さらに奥には、東西7m、南北4.8mの礎石建物S B 3201があり、この建物の下層にも、礎石建物S B 3202が重複して検出されている。

発掘された遺物

第51次調査で出土した遺物は総点数41,442点に上る。その内訳は、越前焼10,305(24.9%)、瀬戸・美濃焼1,033(2.5%)、土師質土器22,462(54.2%)、瓦質陶器その他211(0.5%)、中国製陶磁器5,032(12.1%)、朝鮮製陶器241(0.6%)、金属製品1,083(2.6%)、石製品656(1.6%)、木製品419(1.0%)である。

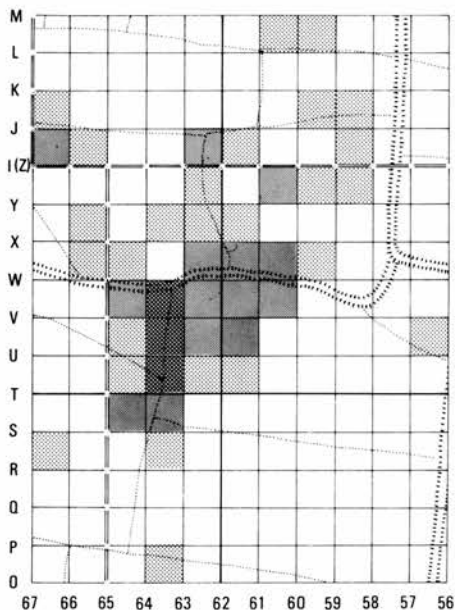
調査区の遺構の性格からみて、北半の武家屋敷地区と南半の町屋地区とに大きく区別される。そして、北半の武家屋敷地区での出土遺物は25,271点上り、町屋地区での16,171点を上回り全体では6割を占めている。この傾向は当然、両地区の発掘面積の多少に関わることであるが、南北溝S D 3031とそれ以西の礎石建物S B 3059・S B 3060の表土及び焼土層中からの集中的な遺物の出土状況が反映されていることも又、地区全体の各グリッド別集計から伺える。表土層に遺物が集中していることは旧耕田に使用されていた畦畔に遺物が掻き寄せられた結果とみることができし、焼土層に遺物が集中していることについては、従来の各調査例によって常に指摘されており、今回もこの礎石建物などを被う、炭化物を多量に伴う焼土層が遺存していたことによって得られた結果でもある。

この中国製陶磁器に関しては昨年度の調査において、青白磁梅瓶、青磁壺、同鎬文壺、同刻花文盤、白磁皿（口禿タイプ、腰折れタイプなど）の破片が既に若干出土しており、今回もこの隣接する調査区で同様の遺物が出土することが予想されたが、結果は器種・量共にその予想をはるかに上回る遺物が得られた。一乗谷出土の中国製陶磁器としては従来から少ない例でもあり、不明な部分も多かったが、ある程度これをカバーしうる資料となるものとみられる。今後の整理及び比較研究などに期待がもたれる。

挿図-2 調査区模式図(旧地形との比較)



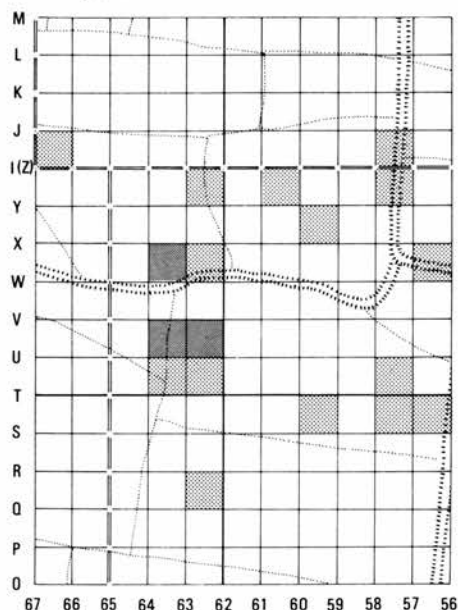
挿図-3 青白磁梅瓶出土分布



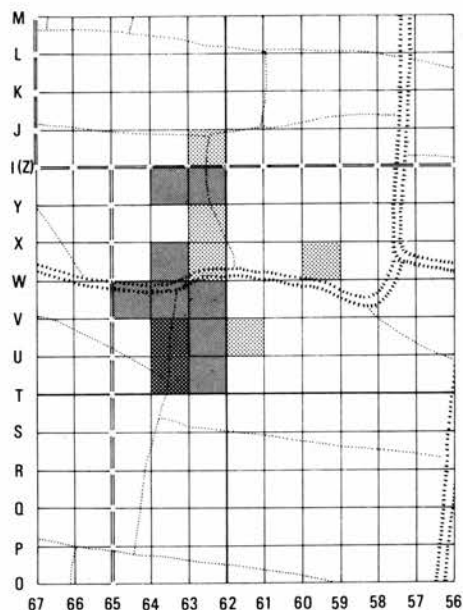
さて、個別にみてみよう。まず、青白磁梅瓶(1)であるが、その出土分布を挿図3に示した。各グリッド毎にアミの濃淡で密度の差を表現したが、粗いアミが出土点数0.5~1まで、次のアミが1.5~5まで、最も濃いアミは5.5以上の3段階表示とした。以下同様。出土点数が少数点以下を示しているのはグリッドが2個以上にまたがっている場合、出土点数を機械的に等分したためである。挿図に取り上げたものは、いずれもグリッドがまたがるケースは2個までであった。また出土分布の図化に際しては、各器種共に接合しえた破片のみを取り扱い、同一個体と見られる場合でも接合しえなかったものについては除外してある。従って、この出土分布図は第51次調査を終えた時点での出土状況に対する、ある段階の分布を示す限定的なものとしておきたい。

青白磁梅瓶の出土点数は計116点で、これには第49次調査での12点が含まれる。器型・文様共にほぼ全体に近いものに復元することができた。出土分布はグリッドPT63・PU63を中心に武家屋敷地区とした調査区の北半に広い分布を示す。グリッドPT63・PU63にはカメピットSX3115があり、この遺構から比較的多数出土している。次に青磁壺(下蕪花生か?)(21)であるが、その分布は武家屋敷地区のほぼ全体にわたっているが、特に分布の中心はなくまばらである。計23点出土している。しかし、次の青磁刻花文盤(26)ではやはりPT63・PU63で集中的な出土分布を示す。これはPT63・PU63の表土層(特に畦畔)やカメピットSX3115での集中的な出土が要因であった。計67点。そして、この傾向を最も顕著に示すのが次の天目瓶(19)の出土分布で、PT63・PU63及びその周辺部だけに集中する。器型の約半分が復元しえた。計31点。挿図2の調査区模式図をみると、旧耕田の地割りは検出された溝や、建物群の区

挿図-4 青磁壺出土分布



挿図-5 青磁刻花文盤出土分布



画などに規制されていることが考えられるし、今回、紙数の制約上特に図示しえなかったが、調査区の各グリッド別遺物出土の集計からは旧耕田の用水路や畦畔と重なるグリッド、例えばP Q～P V 63やP V～P Y 62では他のグリッドが200点前後の出土点数を示すのに対して800～1,000点前後を示す。

表1にはこれらの層位別出土状況を示した。「I段階」はグリッド設定時から表土(耕土)を除去するまでの段階を一括した。「II段階」は遺構面の検出段階で出土したもの、「III段階」では遺構面の精査、溝やピットなどの完掘、或は炭・焼土層の除去によって得られたものを一括した。そして、発掘時の排土からのもの、表採分のものについては各々の合計点数の下にカッコでその数を示した。この中で白磁印花文皿(6～8)が「III段階」のみ7点の出土となっているのは礎石建物S B 3060炭・焼土層からの一括出土であったことを示す。計7点がほぼ完形のまま出土し、うち3枚の内面にスタンプによる菊唐草文が見られ、他は無文となっている厚手の削り高台を有する皿である。又、挿図には示さなかったが白磁皿の口禿タイプ(2～5)や白磁皿の腰折れタイプ(9～11)、或は青磁乳鉢(23)、同片口鉢(20)、同輪花皿(13～17)などもここでは層位別に分けて示した。いずれも数量的な層位毎

挿図-6 天目瓶出土分布

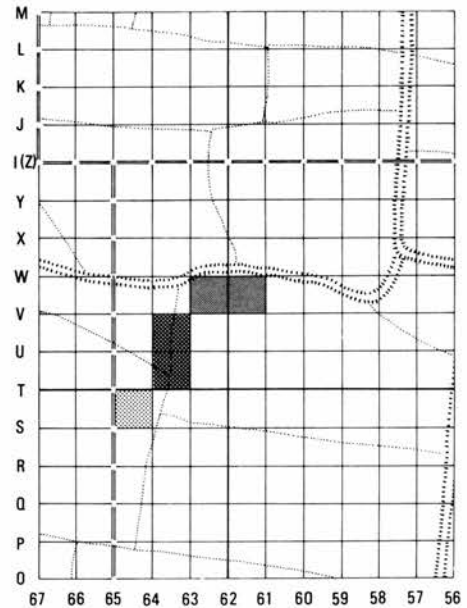


表1 中国製陶磁器層位別分布状況

器種別	青白磁梅瓶	白磁印花文皿	白磁皿(腰折れタイプ)					白磁皿(口禿)		青磁乳鉢	青磁片口鉢	青磁壺	青磁刻花文盤	青磁輪花皿(腰折れタイプ含む)						天目瓶	段階別小計		
			イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	イ					ロ	イ	ロ	ハ	ニ	ホ			ヘ	ト
I段階	38	0	4	2	4	4	1	2	6	2	3	7	6	19	0	2	2	0	1	1	2	1	107
II段階	24	0	4	8	5	1	4	5	4	6	7	3	6	11	9	1	3	3	4	3	5	5	121
III段階	51	7	5	8	2	4	0	4	14	5	6	7	10	34	3	10	3	4	4	8	2	23	214
合計(除外分)	113 (3)	7	13 (1)	18	11	9	5	11 (1)	24	13	16	17	22 (1)	64 (3)	12	13	8	7 (1)	9 (1)	12	9	29 (2)	442 (13)

の差異は見られず、青白磁梅瓶の「I～II段階」での出土比率が高いことから考えられるように、水田耕作による土層攪乱が比較的進んでいる状態が了解される。以下、図版の説明に移る。

越前焼 第51次調査では4カ所で計7基のカメピットが検出され、そのうち甕が遺存していたのはS X 3154とS X 3155の2個であった。他に目立つものとしては壺・すり鉢・鉢・卸し皿などがある。壺(33)は「×」印のへら記号を有し、割れ面には漆による修理痕がのこる。

瀬戸・美濃焼 灰釉皿(35)は腰折れタイプの端反り皿で、腰部以下は露胎である。山梨県新巻本村出土の一括遺物に類似する。同(37)は見込みに菊花のスタンプをもつもので、口縁部には指頭による花卉風のひねりこみが見られる。花卉は9枚と推定される。同碗(39)は線描き蓮弁文を有するもので類例が第44次調査(概報XIV)に見られる。

土師質土器 一乗谷では常に他の遺物量を凌駕しており、大量に出土する。今回は南北溝S D 3031での出土が目立った。皿の出土点数は22,312点でこれは総点数の約5割に相当する。皿(43)は、内面に墨書を有するもので、「月」、「鬼」が夫々4単位、放射状に書き込まれている。

中国製陶磁器 又、同じ図版に示した(45・46)の碗は共に中国製品である。(45)は見込みにスタンプ文をもち、昨年度第50次調査出土の白磁碗と接合した。出土地点はグリッドP M 56で、第50次出土のものとは距離にして約100m近く移動している。(46)はやや緑色味を帯びた端反りの碗破片で、口縁部にはおそらく釉のふきとりとみられる露胎部がめぐる。

金属製品 今回は特に礎石建物S B 3059・3060・3065などの炭・焼土層からの出土が目立った。家具の引手金具と見られる(75～78)や、匙(70)、筒金具(51)、鉤(50)、毛抜(79)、水滴(66)、環付金具(65)、銅錘(57)、などはいずれもS B 3059・3060の礎石建物を被う炭・焼土層出土のものである。甲冑金具と見られる(47)や小札(60～64)などは溝S D 3034東側の焼土層出土である。又、注目すべきものに(83)の金槌がある。柄は失われているが、柄を固定・補強するために打ち込んだと見られる和釘が柄穴にのこっていた。

木製品 木製品には黒漆皿(85)、同碗(88)や朱漆皿(86・87)、或は櫛(89～90)、下駄(100～102)などの他に木刀の鏝と見られる(92)やへら(97)、蓋(84)がある。又、呪符の一種かと考えられる(94)や陽物(93)など特殊な木製品もある。(94)は下端で折損しており、その上方に横位の刻線が5本見られる。そして、つい最近まで織物工場などで織機具として使用した糸巻の一部に酷似する木製品(95)が出土して注目される。

その他 礎石建物S B 3059・3060の炭・焼土層から編布の一部と見られる(104)が出土した。又、カメピットS X 3115からは銅銭が融着した状態で出土した(103)。同じカメピットの付近で炭化した紙片の塊が発見された。次にやや詳しく触れてみる。

焼紙断片 部分的に紙の繊維が認められるものもあるが、ほぼ完全に炭化している。しかし、墨で書いた文字は明瞭に残っており読み取ることができる。文字を記した面が向かい合って折り重っているものがあるので、もとの形態は卷子本ではなくして冊子本であったと考えられる。一乗谷では以前にも文字を記した炭化紙片が出土したことがあり、それは『庭訓往来』の一部であったことが確められている(特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅷ参照)。今回出土した炭化紙片に記された文章の出典は未詳であるが、医学書の一部であると推測している。以下に釈文を記す。

- | | | | |
|-----------------------------|----------------------------|------------------------------|---------------------------|
| (1) 「神□□□ | (10) 「定□□ | (18) 「吐血□□
□氣□□ | (27) (草カ)
「本□□
□痛下痢 |
| (2) □□
□□不止有□
□□□□ | (11) □食□□ | (19) 「餘□ | (28) 「□
本草 |
| (3) □□々明□
□維□ | (12) □大陽経
□□明□ | (20) 「補不□□
玆□補胃□ | (29) 「(気カ)
□□
東垣□ |
| (4) 「其□□ | (13) □做□□
□草□
(本カ) | (21) 「泄辟□ | (30) 「□
狂惑□ |
| (5) □散□
□□胸中鬱□ | (14) 「鼓□胸脇□□
血脉□□ | (22) 「黄□□ | (31) □
□□□
(猶カ) |
| (6) □□
□每也於
□
(可カ) | (15) □□□□
□□益氣療□
□□□ | (23) 「□□□□
不用酒□□ | (32) 「效□因□ |
| (7) 「液□□ | (16) □□□□
□□陰太□□ | (24) 「象□□ | (33) 「療傷□ |
| (8) 間□
□実執□ | (17) □眼□
□胃為君主□□ | (25) 「下□□
□□□胎□
(妊娠女カ) | (34) 「汗骨□
□ |
| (9) □心□□
□□而□□ | | (26) 「□□□□
瀉心其□ | |

紙片は、現在までに剥がすことができたのは34点にのぼる。まだ重ったままのものがあるので、総点数は増える可能性がある。(12)「大陽経」は、漢方医学で足太陽膀胱経の簡称として用いる太陽経のことであろう。(15)「益気」は補気といい、気虚の証を治療する方法を意味する用語である。(17)「君主」は、漢方薬の君薬の「君」と「～を主さどる」の「主」であって、「～胃を君と為し、～をつかさどる」とよむのであろう。(29)「東垣」は、金元代の医家の著作十種を収載して15世紀初に刊行された医書『東垣十書』などにその名が見える中国の医家李東垣のことであると考えられる。李東垣や朱丹溪の医学は、室町末期の医家曲瀬道三の師田代三喜が長享二年(1488)渡明して深く学んだもので、強壯滋養の効ある温補剤を用いる点に特色があるとされている。以上に述べたことによって、炭化紙片は金元代の医家の説をも取り入れた医学書の一部であると考えられるのである。一乗谷では、南都の医師谷野一柏が来越した折に『八十一難経俗解』を刊行したことがあるが、今回の炭化紙片の出土により、当時の医学のあり方について考える上での貴重な資料が得られたといえよう。

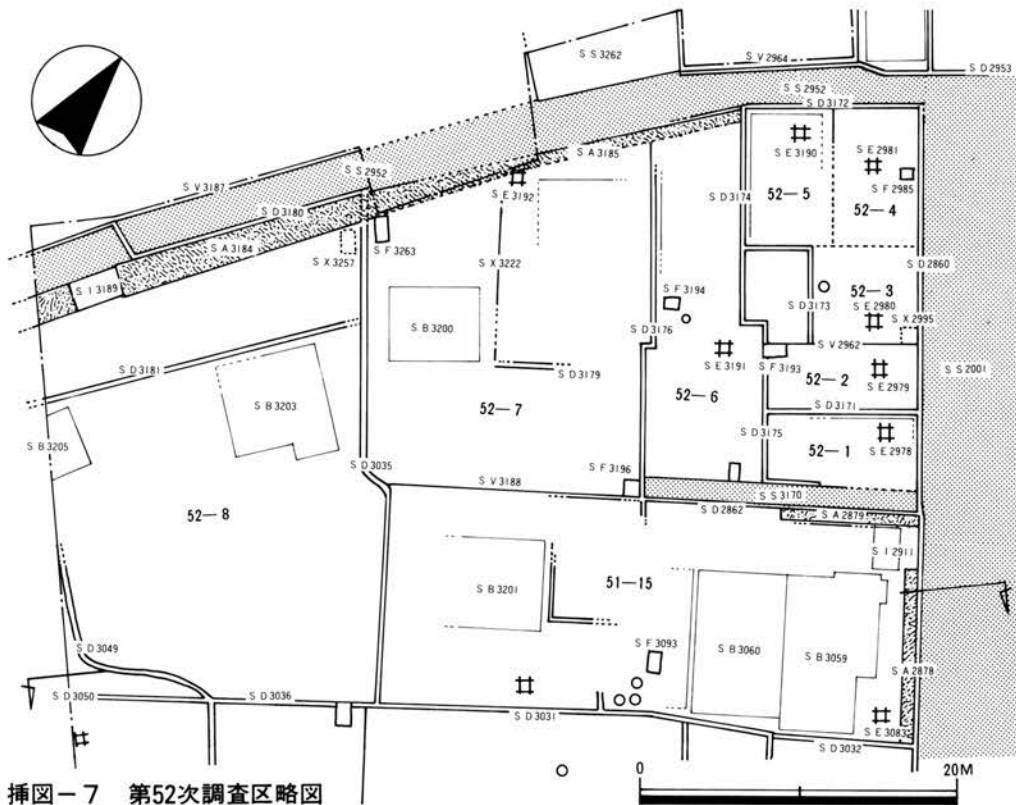
第 52 次 調 査

この調査は、第51次調査に引き続き、その西、福井市城戸ノ内町字吉野本地係約1930㎡を対象としたものである。この地区一帯は、これまでの調査で明らかにされたように、当時の町割が非常に良く残されており、東半の南北方向幹線道路側には町屋と考えられる小規模な屋敷群が、西半の山側には寺院を中心とする大規模な屋敷が配されている。今回の調査は、こうした調査成果をふまえ、その範囲を拡大することによって、より詳細な町割の資料を得ようとするものである。

調査は、第51次調査に引き続き、昭和60年8月5日から遺構検出を開始し、11月7日に51・52次を合せ、ヘリコプターによる空中写真測量を実施し、実測図を得た。その後、若干の補足調査を経て、現在は、遺物整理等を中心とする室内作業を進めている。ここではその概要について報告する。

発掘された遺構（P L. 13～18、第2・12・13図）

調査区は、第51次調査区の西、第50次調査区の南に位置し、東西約35m、南北約55mの広さを持つ。検出された主な遺構は、道路3、土塁及石垣5、溝14、礎石建物12、門1、井戸7、



挿図-7 第52次調査区略図

石積施設6、銅銭貯蔵遺構1等である。(前年度の第50次調査により一部検出されているものも含む。)調査区内は、検出された溝等の遺構によって9区画の屋敷に分けられる。そこで、まず、この骨格となる道路等の遺構について述べ、次いで、区画別にその概要を述べることにする。なお、各区画については挿図7に示した仮番号を使用する。また、51-15については、第51次調査の項で一括して取り扱っている。また使用する方位については、基本的な町割方向に従い一乗谷川側を東、山側を西とする。

S S 2952 南北方向道路である。東西方向道路 S S 2001の西端から南へ延びる。幅は約2.7mである。この西には一段高い位置に大規模な屋敷が存在すると考えられ、非常に大きな石を使った石垣 S V 2964・3187がみられ、また、西の屋敷への進入路とみられる西へ向う道路 S S 3262が存在する。(PL .13・14)

S S 3170 屋敷の一部をさいて設けられた南北方向の袋小路で幅は約1.5mである。この道路の東には側溝 S D 2862が存在し、東西方向溝 S D 3176を受ける。この道路の東側延長線上に石列 S V 3188があって、基本的な町割線を形成する。(PL .14)

S D 3035 東西方向溝で、幅は約0.5mである。道路 S S 2952の側溝 S D 3180は土塁 S A 3184を暗渠 S Z 3264で抜け、この溝にそそぐ。この溝は東で南北方向溝 S D 3031に続く。基本的な町割線と考えられる遺構であり、中程の石列 S V 3188との交点で矩折れになっている。

52-1 東西方向道路 S S 2001に面する屋敷で、東は道路 S S 3170、西は溝 S D 3171、南は溝 S D 3175で区画される間口約4.5m、奥行約10mの規模を持つ。入口と考えられる石製踏石 S X 2993が存在し、内部には井戸 S E 2978がみられる。(PL .16、第12図)

52-2 道路 S S 2001に面する52-1と同規模の屋敷で、東は溝 S D 3171、西は石垣 S V 2962、南は溝 S D 3175で区画される。内部には井戸 S E 2979と西南隅部の石積施設 S F 3193がみられる。(第12図)

52-3 道路 S S 2001に面する屋敷で、東は石垣 S V 2962、西は溝 S D 3173の南北方向延長線、南は溝 S D 3174で区画され、間口約6m、奥行約11mの規模と考えられる。内部には井戸 S E 2980、石積施設の可能性が考えられる S X 2995、埋襲遺構 S X 3212が存在する。(第13図)

52-4 2つの道路 S S 2001・2952の交点東南隅部に位置する屋敷で、東西約9m、南北約5.5mの規模を持つ。西の道路 S S 2952に出入口を開くのではなかろうか。内部には井戸 S E 2981、石積施設 S F 2985、流しと考えられる石敷遺構 S X 2996が存在する。(第13図)

52-5 南北方向道路 S S 2952に面する屋敷で、南は溝 S D 3174、東は溝 S D 3173で区画され、間口約5.5m、奥行約9mと北の屋敷52-4と同規模である。内部には井戸 S E 3190がみられ、また建物は中程の石列 S X 3208を境に2つに分かれていたと考えられる。(PL .15、第13図)

52-6 前述した52-1～52-5の屋敷の裏手に位置する屋敷で南北の2条の道路 S S 2952・3170の2つに面するが、西が表であると考えられる。南北を区画する2条の溝 S D 3174・3176

の矩折部で東西2つの屋敷に分けられる可能性も考えられる。井戸はS E 3191の一基の検出であるが、石積施設はS F 3194・3195の2つが検出されている。(PL. 16)

52-7 南北方向道路S S 2952に面する屋敷で、南は溝S D 3035、東は石垣S V 3188、北は溝S D 3176で区画され、南北約18m、東西は北で約23m、南で約19mの規模を持ち、一般の町屋に比しかなり大きく、また、道路側には土塁が設けられていたと考えられ、一般の町屋とは性格が異なるが、削平された所が多く詳細は明らかでない。屋敷内は、石列S X 3222によって2分されているようである。井戸S E 3192は土塁際中程に位置し、石積施設S F 3196・3263は、東北及西南の両隅に位置している。建物は北半にS B 3199、南半に3200が検出されているが不明な点が多い。その外、この屋敷で注目されるのは、銅銭貯蔵遺構S X 3229である。これは、楕円形に石を並べ、この上に水槽の転用と思われる長径約70cm、短径約50cm、深さ約30cmの笏谷石製の筒を乗せている。中には直接ひもに通した比較的良質の銅銭が計3784枚納められていた。この種の遺構が明らかとなったのは一乗谷において初めてのことである。(PL. 17)

52-8 道路S S 2952に面し、土塁S A 3184とそこに設けられた門S I 3189を持つ大規模な屋敷で、南へさらに延びており、南北幅は明らかでないが、東は溝S D 3031へ続く溝S D 3036・3050が、北は溝S D 3035が境界となる。東西幅は北辺で約33mである。土塁の中程に設けられた門S I 3189は間口約3mで、正面土塁端には大きな石を立て、道路から少し中へ入った位置に棟門形式の門を構えていたと考えられ、その礎石が残る。屋敷内の南北方向溝S D 3181は後半には埋められているが、この溝と土塁の間には北端を除き遺構はみられない。また石列S X 3254・3255とS X 3249を結ぶラインで、屋敷内は2分されていたようである。建物S B 3203は南北棟と考えられ、南北6.7m、東西5.8m、東北部に0.9m×2.7mの張り出しを持つようである。基準となる柱間寸法は明らかでない。建物S B 3205は北半の検出であるが、比較的大ぶりで扁平な石を並べたもので、土台を廻した建物の可能性が考えられる。井戸は調査範囲内では検出されていない。西北辺の一部に杭を打ち横木を土留状に渡した遺構S X 3257は、石積施設的な性格を持つとも考えられる。また、東部の土垣群S X 3241・3245～3248には多量の木片等がみられた。(PL. 17)

以上屋敷毎に概要を述べた。最後に全体を概観し、まとめとする。

この地区は、中程の東西方向溝S D 3035を境にして基本となる軸線に大きな変化がみられる。すなわち、北部の屋敷群は、基本的には東西方向の幹線道路S S 2001に規定される。これに対し、南半は、これまでの地上観察等からも指的されているように、西へ延びる八地谷附近で、一乗谷の町割線が大きく振れると推定されている地点であって、ここで、その振れを調整していると考えられ、これを反映して、道路S S 2952、土塁S A 3184等が小さきみに変化し、変則的な面がみられる。また、幹線道路に面する小屋敷群は町屋的な要素が強く、これに対し、裏手ともいえる道路S S 2952に面する2つの屋敷は前記の小屋敷とは性格が異るといえよう。

発掘された遺物

遺物整理の概要 基本的には36次・50次調査で行った方法を踏襲した。すなわち、遺構の所で述べたように、溝・土塁・段によって52-7・8の武家屋敷・52-1～6の町屋群に区画できるが、①遺物もこの区画単位に扱う。②各区画内の遺物は、建物・土層を基準とした遺構面毎の遺物群に分ける。③溝・井戸・石組枡や土拵等まとまりのある遺構から出土した遺物は、それぞれ独立して扱い、溝で分層できる場合はそれに従う。ただし、床土を除去した段階で検出した遺構に伴う遺物群をグループIとしたが、この点については注意を要する。すなわち、同一区画内でもある区域は一乗谷滅亡時の遺構に伴う遺物が出土するし、別の区域ではその後の削平によって、より下層の遺構が床土直下に存在することがあり、どうしてもこの遺構に伴う遺物群が混入する。グループII以下の遺物群についてはそのようなことは少ない。また区画が異なれば遺構面すなわち遺物群が対応しているとは限らない。

以上のような整理方法によって、遺物の一片一片にナンバーを付して台張に登録する作業までは終了した。しかし、接合、復元する時間的余裕がなかったので、今回は52次発掘区の主要部を占める武家屋敷と町屋群出土の遺物の概要を報告する。なお、遺物の分類については、越前焼は「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告」1983・中国製陶磁器碗・皿は「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」貿易陶磁研究No.2小野1982によった。

区画52-8 グループI (PL.19・第14図)

S B3203を基準とする遺構面から出土した遺物群である。68ライン以東はこの遺構面が削平され失われているので、床土除去時に現れた整地層中の遺物群が含まれる。

越前焼 甕は破片数474のうち24片の口縁部が出土した。(1～3)は越前焼IV群に比定でき、中でも(1)は口縁部が最も肥厚するタイプである。(4)は口縁が肥厚するきざしに見えるIV群a、(2・3)はその中間IV群bの段階の口縁である。IV群のスタンプは(6)のように凹の本字と格子の組合せである。壺は図示できなかったが、お歯黒壺や四耳壺の破片も出土している。播鉢は口縁が内傾気味に切られ、口縁内側に凹線もしくは段を有するIV群(7)が主体である。播目は隙間なく刻まれ、また見込みにも存在するのが一般的である。(8)は内湾気味の器形で中程から下だけに播目のあるやや特殊な例である。

瀬戸・美濃焼 鉄釉では天目茶碗の割合が高く、63点出土している。口縁下のくびれが強く、高さとお口の比がほぼ等しい碗(9・10)が主である。(11)は口縁下のくびれが弱く全体に丸みを有する碗で腰部以下は露胎である。鉄釉皿は1点しか出土していない。(12)は頸部が少しくびれ、胴から腰にかけてふくらみが増す筒状の壺である。灰釉は碗が少なく、皿の割合が高い。内湾する皿(13)や、内側に彫り込みを入れて菊皿状にした皿(14・15)が多い。(16)は高台部付近から大きく開く皿で、口縁内側に波状の櫛描文が廻る。他に盤や四耳壺の口縁等がある。

国産陶磁器 (19)は土師質の羽釜で、中では大きい部類に入り直径18cmある。底部には煤が付着したものもある。瓦質の火鉢(20)や香炉・瓦燈の他、備前焼(21・22)?・珠州焼の甕(23)等が認められる。

朝鮮製陶磁器 (24)は艶のある暗緑色の釉がかかったそば茶碗で、胎土は緻密で暗灰色を呈する。(25)は象嵌青磁の瓶子の底部近くの破片である。黒色土と白土による芭蕉葉文と白土による雷文の象嵌が施されている。

中国製陶磁器 青磁では碗・皿・盤・香炉等がある。碗は線刻の蓮弁文碗が多く、無文の碗(26)がこれに次ぐ。器形は双方共通しており、腰部から丸味をもって立ち上がり、高台は高さの割に径が小さく畳付まで施釉され、高台釉の釉を蛇目状に拭き取っている。見込みには吉祥字のスタンプがあるもの(27)も多い。皿は厚手の稜花皿が少なく薄手の輪花皿(28)の割合が高い。(29)のように碁笥底の皿も少量ながら見られる。楕円形をした菊花状の杯が、20個体程出土した。白磁皿は、端反りのC群が主体で礎石建物S B 3203の東側附近の焼土層からまとまって出土した。同じ端反りの皿でも口径が10cmに満たないもの(31)から20cmを越すものまで大小差があるが、口径12cm前後のものが多い。胎土が灰色で釉に貫入の多い内湾する皿も少し混じる。杯は見込みに露胎圈をもつ端反りの小杯が多い。なお碗は3片のみである。染付は碗・皿がそのほとんどである。碗は蓮子碗で外面に芭蕉葉文をもつC群I(36)、高台脇に蓮弁(?)、体部に唐草文を描くC群V(37)、見込みが広く体部にアラベスク文を描くD群(34)、外面は唐草の暗花文のみで口縁下の内面に四方禪文が廻るE群VII(38)、体部の四ヶ所に円窓を描くE群(39)等がある。染付皿は碁笥底で外面が芭蕉葉文のC群I(40)、見込が十字花文、外面が渦文で端反り皿のB群VIII(41)、外面が唐草文、内面が玉取獅子文B群VII(43)、同じく外面が唐草文で内面が十字花文のB群VI等が主で、これらC群とB群で染付皿全体の8割を占る。他には少量のB群と口縁が内湾するE群がある。(46)は文様が回線のみで高台裏に宣徳年造の擬銘がある。(48~50)は同一個体で大振りな輪花状の鉢である。口縁の内外面に四方禪が廻る。他には松や草、岩等が描かれ、(50)の雲の形や呉須の発色からいわゆる雲堂手に属すると考えられる。

区画52-8 グループII群 (P.L.20・24・第15図)

礎石建物S B 3203の下に存在する炭混り黒褐色土層から出土した遺物を中心とする遺物群である。

瀬戸・美濃焼 鉄釉では天目茶碗の割合が高く、皿や壺等は少ない。(51・52)は口縁下のクビレが強く、端部の微妙な外反の仕方などほぼ共通しており、一乗谷で最も多く出土するタイプである。(54)は底部を欠くがおそらく碁笥底状の皿であろう。釉は褐色と暗茶褐色がむらむらになっている。灰釉は皿が多く、碗や鉢は少ない。(55)は天目茶碗形の碗、(56)は青磁碗C類を写した碗であろう。(57)はやや内湾する皿で見込に菊の印花がある。(58・59)は内湾する

内面に菊花状に刻みを入れた皿で、これら2例のように内湾する皿の割合が高く、端反りの皿は少ない。

中国製陶磁器 青磁は全体に少ない。碗は蓮弁文碗C群(63)が主で、片切蓮弁文(64)や雷文を持つB群は少ない。皿はグループIと同様輪花皿が多い。(68)は一乗谷で最も多く出土する香炉で、体部は竹筒状、内面は露胎である。白磁はやはり端反りの皿C群が主で、少量の碗が混る。(69)は碗というより大きく広がる鉢で、胎土及び焼成は、血磁皿B群の軟質のものに似る。一乗谷での出土例は少ない。(71)は見込みが露胎圏の端反り小杯である。染付類は小片で出土点数が少ないが、傾向はグループIと変らない。(74・75)はより下層のグループIIIに属する染付皿で、文様は外面が唐草文、内面が十字花文である。呉須が濃青色に発色している。文様構成は染付皿B群と同一だが、器形では高台が、山梨県新巻出土の染付碗(小野1981・山梨県東八代郡一宮町新巻出土の陶磁器・貿易陶磁研究No.1)のようにやや高く、畳付は釉を拭き取っている。(77)もグループIIIの遺物で、外面は文様がなく、見込みにだけ唐草文が描かれている。端反りで高台は(74)ほど高くなく断面三角で、畳付部の釉を削り取っている。

金属製品 (78)は鉄製の錠前で鍵がかかったまま焼けてしまったらしく、本体の金具がついている。(79)は鉄で、一方の刃先を欠くが、まだ弾力性が残っている。(80)は青銅製の錘である。六角形で作りも良好である点からおそらく中国製であろう。(82)は鈴で保存状態が良く、まだ音を発する。(83)は紅皿、一部に紅が付着している。(86)は小札で、全体に錆が進行しており、表面に漆が塗ってあったか否かは不明である。

木製品 遺物群グループIIIには屋根材を主とした多量の木製品がある。屋根材は厚さ3mm前後・巾12~13cm、(長さは破片のため不明)の薄く割って製材した板である。材質は杉か。(88)は前歯付近に最大巾がある長円形の連歯下駄で、鼻緒穴は小さくて丸く横尾穴も丸い。作りは丁寧である。(89)は長方形の連歯下駄で緒穴は錐で小さい穴を多数穿孔し一つの穴にしている。前部に最大幅があったり、鼻緒穴から横緒穴までの長さや横緒穴から後端までの長さを比較すると4:3と前者がかなり長いなど、双方とも新しい要素を持っている。

区画52-7、グループI群 (P.L.20・21・22・第16・17図)

S B 3200を基準とした遺構面から出土した遺物群である。

越前焼 甕・壺・播鉢が主体である。甕は口縁が肥厚するIV群b・c(92)が主で、小片では口縁帯の痕跡が残るII群(91)も出土した。壺は口頸部が少し開き、口縁直下に段のある小形の壺が多い。播鉢は、口縁が内傾して切られ内側に段があるIV群C(94)が多い。播目はほぼ全面にあり、内底にも播目がある。なお(94)は備蓄銭遺構から出土した。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は天目茶碗を主とし、少量の小壺や皿類が混る。(98)は直径、高さ共に3cmの小壺、(99)はその蓋、もしくは茶入の蓋であろう。(100)は肩が大きく張る小壺で、腰から下は露胎である。(96・97)は口縁がひだ状になった鉢で、器壁は非常に薄い、灰釉は皿と少量

の碗の他、四耳壺片(107)や卸皿(106)等が出土している。皿は端反りの皿より内湾する皿(103)が多い。内湾する皿のうちかなりの割合で内面を菊花状に彫込みを廻らした皿がある。(105)は上部を欠くがおそらく鉄釉壺と同じ器形で、腰から下は露胎、底部には回転糸切の痕が残る。

国産陶磁器 (108)は備前焼の壺の底部と推定される。内外面とも茶色をしており、表面には降灰の痕がある。胎土は細かく粘っこい感じがあり、灰色に堅く焼き締まっている。(110)はN字状口縁や胎土などから常滑の甕と考えられる。胎土はやや荒いが良く焼き締まっている。(109)は火桶状の器形で産地は不明である。

朝鮮製陶磁器 (111)は白磁のいわゆる堅手系の碗でまだら状に灰色の釉がかかっている。見込と畳付に重ね焼の際の砂目痕が残る。非常に堅緻に焼き締まっている。玉縁状の口縁を有する焼締めの鉢(113)、外面に薄い灰釉、内面は叩縮の痕跡が残る壺(112)などが出土している。

中国製陶磁器 青磁碗は線刻の蓮弁文碗が主で、見込みに吉祥字のスタンプがあるもの(114・115)も多い。皿はやはり薄手の輪花皿(118)が主である。(119)は碁笥底の皿でやや焼成が悪い。その他小片ではあるが鉢類(120~123)がある。(125)は釉が厚く色合も良い花生、(126)はあまり質の良くない香炉である。白磁は端反りの皿が主で、他の碗、皿は少ない。染付類も全体に少なく、碗はC群(130)、皿はB群(131~134)の割合が高い。



挿図-8 備蓄銭出土状況

金属製品 S X3229から3784枚の銅銭が出土した。開通元宝(621年)から宣徳通宝(1433年)まで41種あり、他に朝鮮通宝や安南の天福鎮宝がある(表2)。北宋銭が多い傾向はこれまでと変わらないが、やや明銭の割合が高く、全体に良銭が多いことは蓄銭にあたって撰銭が行なわれたことを推定させる。

区画52-(1~6)グループI(P L23・第18図) この地区はS S2001・S S2952、路地S S3170に面した町屋群で、50次調査地区と一部重複しているが、50次調査で出土した遺物は今回取り上げていない。グループIは床土を除去した段階で検出した遺構群に伴なう遺物と、ほとんど

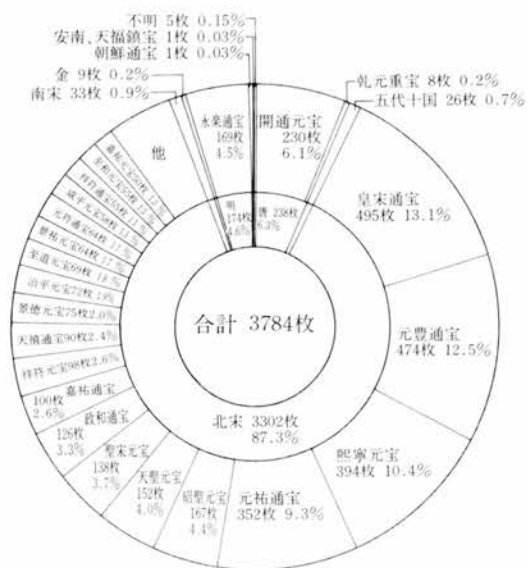


表2 備蓄銭内訳

レベル差のない下層の遺構群に伴う遺物である。

越前焼 甕はⅣ群 b～c が主体で、S F 3193 から口縁帯の名残りがあがる B 群が 1 個体割合まとまった形で出土した。壺はいわゆるお歯黒壺の他、復元高が 35cm 前後の小形の壺が数点出土した。(234～236) はいずれもほぼ直立した低い口頸部を有し、その中央部が少しふくらむ。口端部は玉縁状にならずに断面が三角である。肩は撫肩で、体部下半分は縦方向のへら削りというより撫でつけた跡が見られるのが一般的である。播鉢は口縁が内傾し、内側に段のあるⅣ群(237)が主体である。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は天目茶碗が多く、皿類は少ない。天目茶碗は口縁下のくびれが強く、全体に直線的なもの(238・9)が主で、全体に丸味のあるもの(240)は少量である。(242)は徳利状の鉄釉壺で腰部の下半分から底部にかけては露胎である。(243)は鉄釉四耳壺の一部と思われ、内面にはロクロ痕がよく残っている。灰釉は鉄釉とは逆に皿類が多く碗が少ない。内湾する皿が主体で、見込みに菊花(244)やカタバミの印花を押したものもある。その他、天目茶碗形の碗、染付の小杯を写した杯、灰釉の卸皿も出土している。

中国製陶磁器 青磁碗はへら描蓮弁や無文の碗が多いが、(251)は口縁下に雷文が廻り、(252)は片切のやや幅の広い蓮弁文碗である。見込みに吉祥字のスタンプ(253・4)のあるものも割合多い。青磁皿は全体に少ないが、厚手の稜花皿(255・6)は特に少ない。稜のある杯(257)や向付に使用されるような小鉢(258)等が目立つ。白磁はそのほとんどが端反りの皿 C 群(260)である。(261)は内湾する小皿。染付は碗・皿が主で他の器形はほとんどない。碗と皿の比は 3:1 で皿が多い。皿は外面に唐草文、見込みに十字花文(262～4)や玉取獅子(265)を描く B₁の割合が高く、内割する E 群の皿(267)はやや少ない。(268・269)は洪武・弘治の擬銘の入った皿、(270)は見込に吉祥句を書く皿である。

木製品 (273)は長さ 19.5cm、幅 5cm、厚さ 0.5cm を測る杓子である。両面に墨で絵が描かれている。一面の絵は、俵 2 俵、蛭子金 2 枚、火炎宝珠 3、打出の小槌 2、砂金袋?、橘 1、鶴 2 羽、雉子 1 羽、竹(?)である。もう一面は、男の立像と女の座像、雲?である。人物像側の柄尻の所には 2 字墨書が見えるが判読不能。材は杉と推定される。絵柄から招福のまじない札の一種であろう。(275)は高さ 10.7cm の小仏像で半載した丸棒に彫り込んでいる。もとは彩色してあったらしく朱が少し残る。形から吉祥天か鬼子母神と思われる。鬼子母神なら法華宗と関係が深い。(274)は付札であるが、墨書が消えかかっており、「おか□□□□□せん」としか読めない。(271)は全面に朱色の漆が厚く塗られ、横木取りで木地は薄い。口縁は補強のため漆で肥厚させている。(272)は全体に黒漆を薄く塗り、朱色の漆で文様を描く。双方とも皿というより杯に近い。

石製品 (248)は長方硯で内面が楕円形に切られている。石材の色はやや赤味を帯た黒色である。(250)は笏谷石製で穴は貫通していない。「七十一番職人歌合」の念珠挽きの絵に錐の錘とし

て丸い物が使用されているが、これも錐の一部として使用されたのではないだろうか。(249)は一乗谷に産する浄慶寺(浄教寺)砥石である。

①備蓄銭の遺構が見つかったこと、そしてそれは、永楽通宝の割合が比較的高かったことから撰銭を行っていたことを推定させる。②区画52-1から出土した杓子に描かれた絵柄から招福を願う民間信仰の一端を垣間見ることができた。これらが52次調査の成果の一つである。

第52次調査遺物一覧表

(No.1)

器種	区画	52-8地区					52-7地区					町屋地区				合計		
		Iイコウ	IIイコウ	IIIイコウ	計	%	Iイコウ	IIイコウ	IIIイコウ	計	%	Iイコウ	IIイコウ	計	%		%	
日本製陶磁器	甕壺	474	82	78	634		463	68	5	536		1,079	236	1,315		2,485		
		353	41	75	469		202	71	0	273		543	109	652		1,394		
		308	40	41	389		97	28	0	125		183	41	224		738		
		51	8	8	67		53	17	0	70		64	3	67		204		
		0	1	1	2		2	5	0	7		5	0	5		14		
	越前焼計		1,186	172	203	1,561	29.2	817	189	5	1,011	55.7	1,874	389	2,263	50.6	4,835	41.6
	皿	949	226	798	1,973		247	205	10	462		964	43	1,007		3,442		
		9	4	12	25		7	3	0	10		2	5	7		42		
		1	1	3	5		0	0	0	0		4	0	4		9		
		1	2	0	3		8	0	0	8		3	0	3		14		
	土師質計		960	233	813	2,006	37.5	262	208	10	480	26.4	973	48	1,021	22.2	3,507	30.1
	磁器	碗皿	63	21	22	106		20	3	0	23		47	13	60		189	
			1	0	0	1		1	0	0	1		0	0	0		2	
			25	1	5	31		10	0	0	10		55	4	59		100	
		鉄釉計		89	22	27	138	2.6	31	3	0	34	1.9	102	17	119	2.7	291
碗皿		8	0	6	14		1	2	0	3		1	0	1		18		
		66	13	23	102		15	3	0	18		35	9	44		164		
		4	2	4	10		9	12	0	21		4	0	4		35		
灰釉計		78	15	33	126	2.4	25	17	0	42	2.3	40	9	49	1.1	217	1.9	
美濃他		0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.06	0	0	0	0	1	0.01	
美濃瀬戸計		167	37	60	264	4.9	56	21	0	77	4.2	142	26	168	3.8	509	4.4	
瓦質陶器		3	0	3	6	0.1	2	0	0	2	0.1	5	0	5	0.1	13	0.1	
国産他		12	2	4	18	0.3	3	0	0	3	0.2	11	0	11	0.2	32	0.3	
小計		2,328	444	1,083	3,855	72.0	1,140	418	15	1,573	86.7	3,005	463	3,468	77.5	8,896	76.5	
中国製陶磁器	碗皿	43	8	9	60		8	2	0	10		56	4	60		130		
		158	13	56	227		15	4	0	19		59	6	65		311		
		8	1	0	9		2	1	0	3		8	1	9		21		
		16	0	3	19		7	0	0	7		21	0	21		47		
		1	0	0	1		2	0	0	2		4	0	4		7		
	青磁計		226	22	68	316	5.9	34	7	0	41	2.3	148	11	159	3.6	516	4.4
	碗皿	3	1	0	4		5	0	0	5		2	1	3		12		
		602	36	143	781		77	11	0	88		465	38	503		1,372		
		49	4	9	62		1	2	0	3		16	5	21		86		
	白磁計		654	41	152	847	15.8	84	13	0	97	5.3	492	44	536	12.0	1,480	12.7
碗皿	83	8	23	114		25	4	1	30		64	13	77		221			
	149	10	27	186		51	7	0	58		191	12	203		447			
	8	0	1	9		0	0	0	0		4	0	4		13			
染付計		240	18	51	309	5.8	76	11	1	88	4.8	259	25	284	6.3	681	5.9	
中国他		2	0	0	2	0.04	0	0	0	0	0	5	0	5	0.1	7	0.1	
小計		1,122	81	271	1,474	27.6	194	31	1	226	12.5	904	80	984	22.0	2,684	23.1	
朝鮮製陶磁器	碗	2	0	1	3		0	0	0	0		0	0	0		3		
	壺	9	1	4	14		4	0	0	4		8	4	12		30		
	他	1	0	0	1		1	11	0	12		9	0	9		22		
朝鮮製陶磁器計		12	1	5	18	0.3	5	11	0	16	0.9	17	4	21	0.5	55	0.5	
合計		3,462	526	1,359	5,347	100.0	1,339	460	16	1,815	100.0	3,926	547	4,473	100.0	11,635	100.0	

第46次調査区整備工

(PL.25～28, 第19～21図)

この工事は、昭和58年度に第46次発掘調査として実施した福井市城戸ノ内町字奥間野地係約2620㎡を対象とする平面復原による保存整備工事である。

この地区一帯については、これまでの発掘調査によって、その概要が明らかとなっている。すなわち、東西・南北各方向の幹線道路によって大きな町割が行われ、東半の南北方向道路に沿って屋敷間口6～10m程の町屋と考えられる小区画群が並び、西半の山裾には寺院等と考えられる大規模な区画が配されている。第46次調査区は、東西方向の2条の道路の中間に位置し、幹線道路には面していない。そのため、これらの道路から引き込まれた小路にその門戸を開いている。工事対象地区は大きく3分して考えることが出来る。一つは、西北の墓地を中心とし、既に整備されている寺院に属する。第二は、西山裾の大規模な区画で、ここには池泉がみられ、また多くの建物が密集し、寺院の住空間とも考えられる。第三は、東半の小区画群で、南北方向幹線道路の裏手に位置し、町屋的要素が強い。

今回の整備工事においては、前述したそれぞれの区画の性格の違いと、町割をわかりやすく復原表示することに留意した。そのため、これらの町割の骨組となる溝や石垣等を補修し、東部の小区画群は砂利混ソイルセメント、寺院住空間は赤土、その他芝張等に表示し、屋敷内の建物はレミファルト、ソイルセメント、珪石等で示し、また掘立柱建物は、柱の一部を復原設置した。また、井戸には井戸枠を復原設置し、単調になりがちな環境に変化をもたせた。芝生と共に見学者に緑地と木陰を提供するためにケヤキ・アカマツ等の高木を植栽した。

また、遺跡見学者の遺跡理解の一助として遺構名称を刻した表示石や、調査写真や出土遺物写真等を焼きつけたアルフォト板を用いた石製の平置型の説明板や木製の立置型の説明板を要所に設置した。

なお、参考までに以下に工事仕様概要を示す。

工事仕様概要

盛土・整地工 検出遺構の保護を計り、また、整備工事に上支障のないような基盤面を作るため、良質の排土と山砂を用いて埋戻し、入念に転圧整形した。

溝・石垣等石積補修工 検出された溝・石垣等には崩壊したり、孕みが大きく崩壊の危険の多い所がみられる。そこで、こうした所は、発掘調査時に撤去した石を用いて周囲の石積に習い積直し補修した。

砂利混ソイルセメント舗装工 山砂0.15㎡当り40kgのセメントを加え、少量の水を加え混合

し、敷均しの過程で、砂利0.15m³を上から均等にバラまき、押しつけ、この砂利が表面に一部現われるように施工した。

赤土舗装工 良質の赤土0.7m³当り砂利0.3m³を配合し、入念に展圧・整形した。

レミファルト舗装工 アスファルトブロック(25×120×240)を境界として用い、厚5cmの碎石基盤面上にレミファルトを常温で厚5cm程に転圧・整形した。(第20図)

ソイルセメント舗装工 山砂0.15m³当りセメント20kgを混合し、少量の水を加え木ゴテで厚5cm程に整形した。掘立柱建物表示に際しては、アスファルトブロックを境界とし、碎石基盤面上に施工した。(第20図)

芝張工 高麗芝片を目地幅3cm程で張りつけ、山砂を厚薄のないようにまき、目地を埋め、灌水した。

高木植栽工 樹木は十分に吟味した優良なものを用い、遺構保護のため、鉢の高さ程に盛土の上植栽した。支柱は二脚鳥居とした。樹種はケヤキ・ヤマモミジ・アカマツ・アラカシ・シダレヤナギである。

井戸枠復原設置工 井戸の径によってこれまでの出土例から2種の井戸枠を同材の笏谷石で復原作成し、設置した。

遺構表示石作成設置工 遺構名称を花崗岩に刻し、要所に設置した。

平置型説明板作成設置工 発掘調査時の遺構写真と遺物写真と文章を組み合わせた説明板をアルフォトを用いて焼きつけ、笏谷石を用いた高さ約60cmの低い平置式の基台に取りつけた。(P.L.28, 第21図)

立置型説明板作成設置工 説明文と図面・写真を組み合わせ、アルフォトを用いて焼きつけ、説明板を作成し、これを、周辺環境を考慮し、復原武家屋敷の井戸屋形風の意匠の木製構造物に組み込んだ。(P.L.28, 第20図)

PL. 1



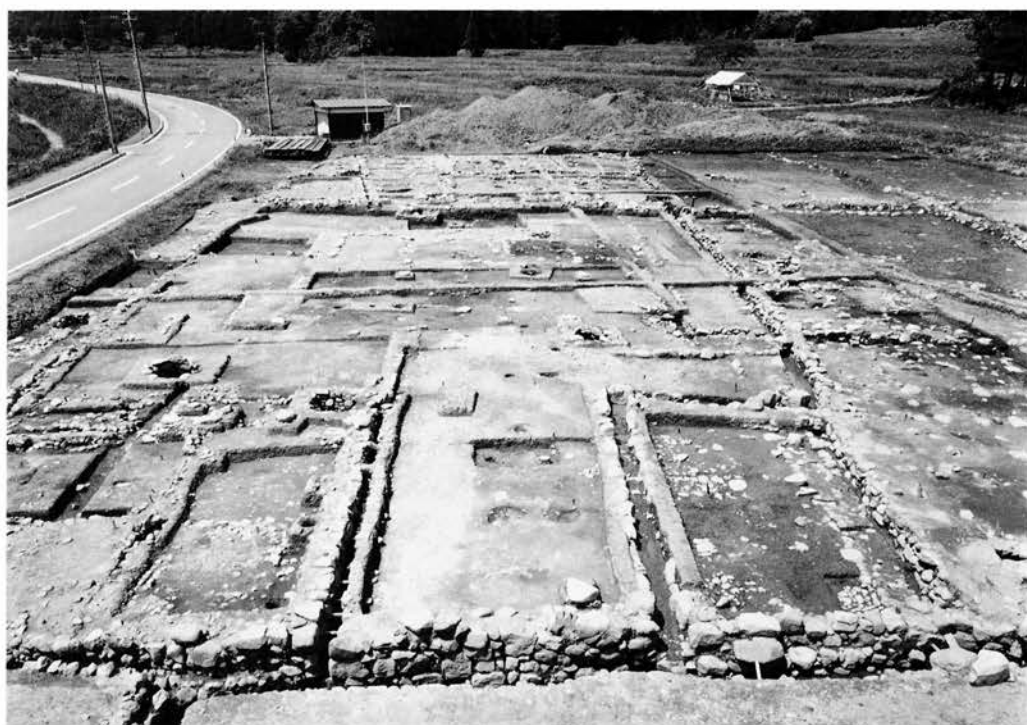
第51次調査区出土の中国陶磁器



第52次調査区出土の杓子



調査区全景 (東北から)



調査区全景 (北から)



調査区南の町屋群 (東から)



調査区北の町屋 (東から)



建物 S B 3065 (西から)



建物 S B 3059 (北から)



◀庭S G2914に付属した井戸S E3083

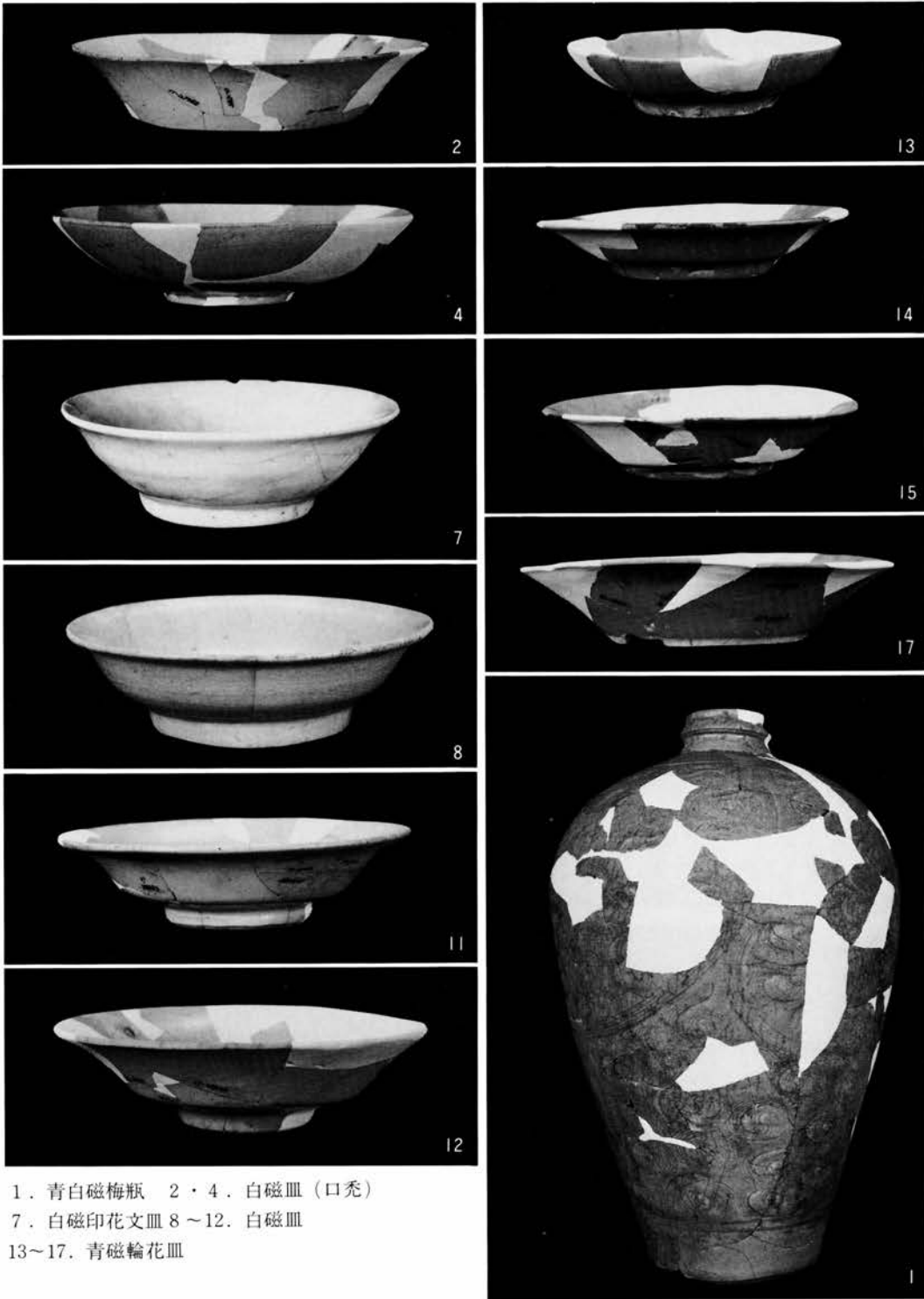


建物S B3061 (北から)

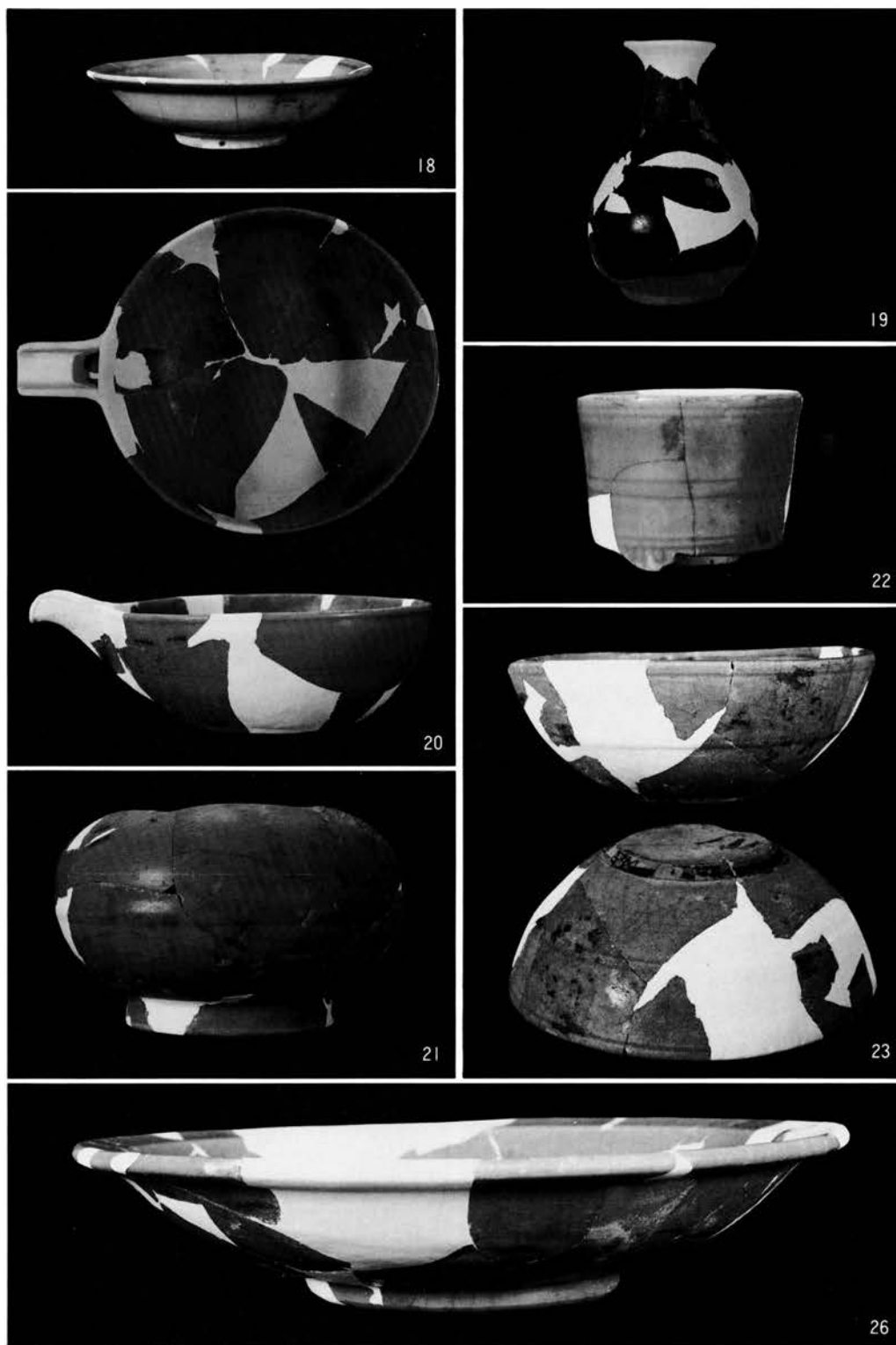


根石 S B 3076, 礎石と鉢巻石 S B 3073, 炉 S X 3152

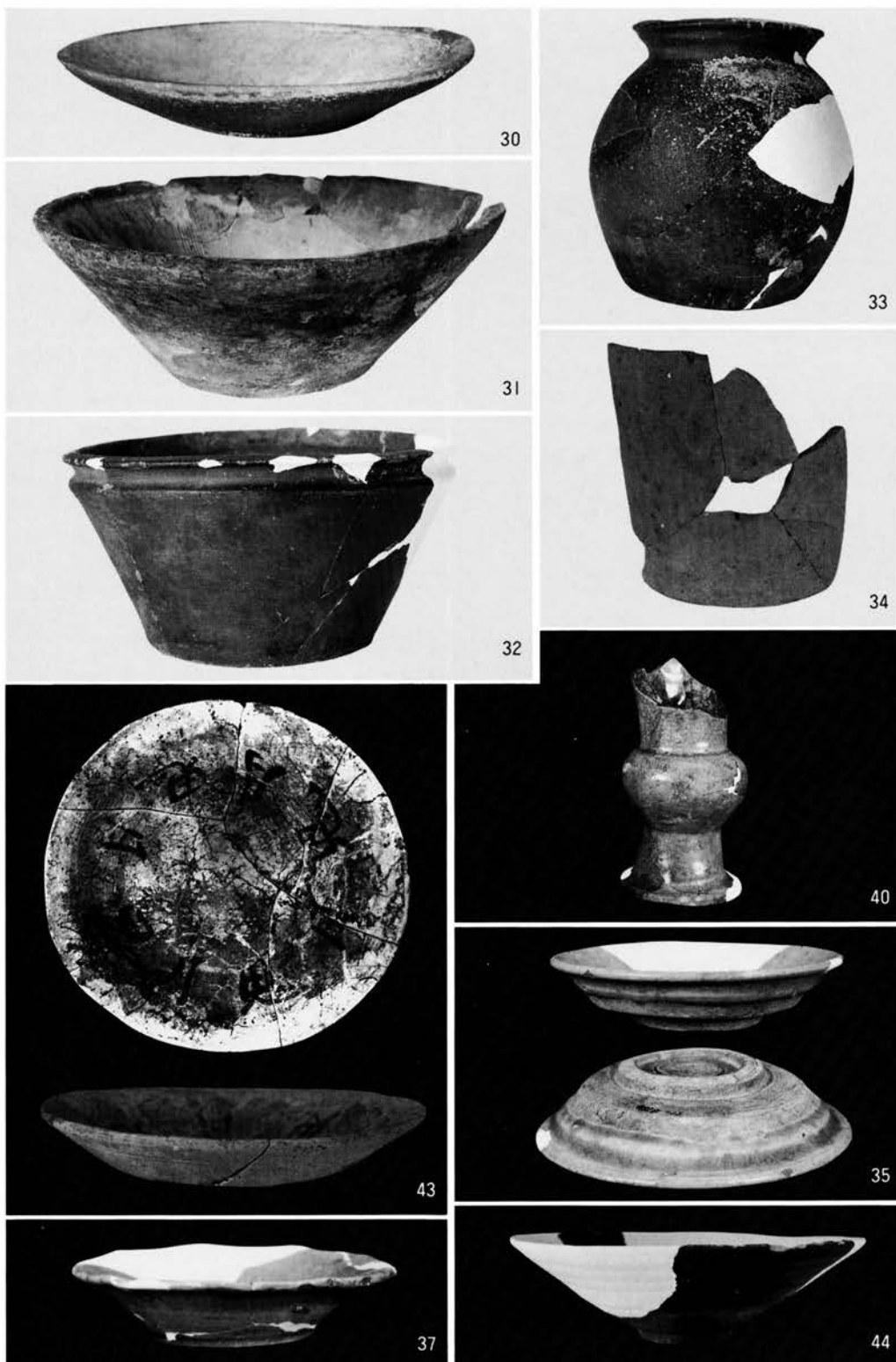
大甕 S X 3115, 溝 S D 3032



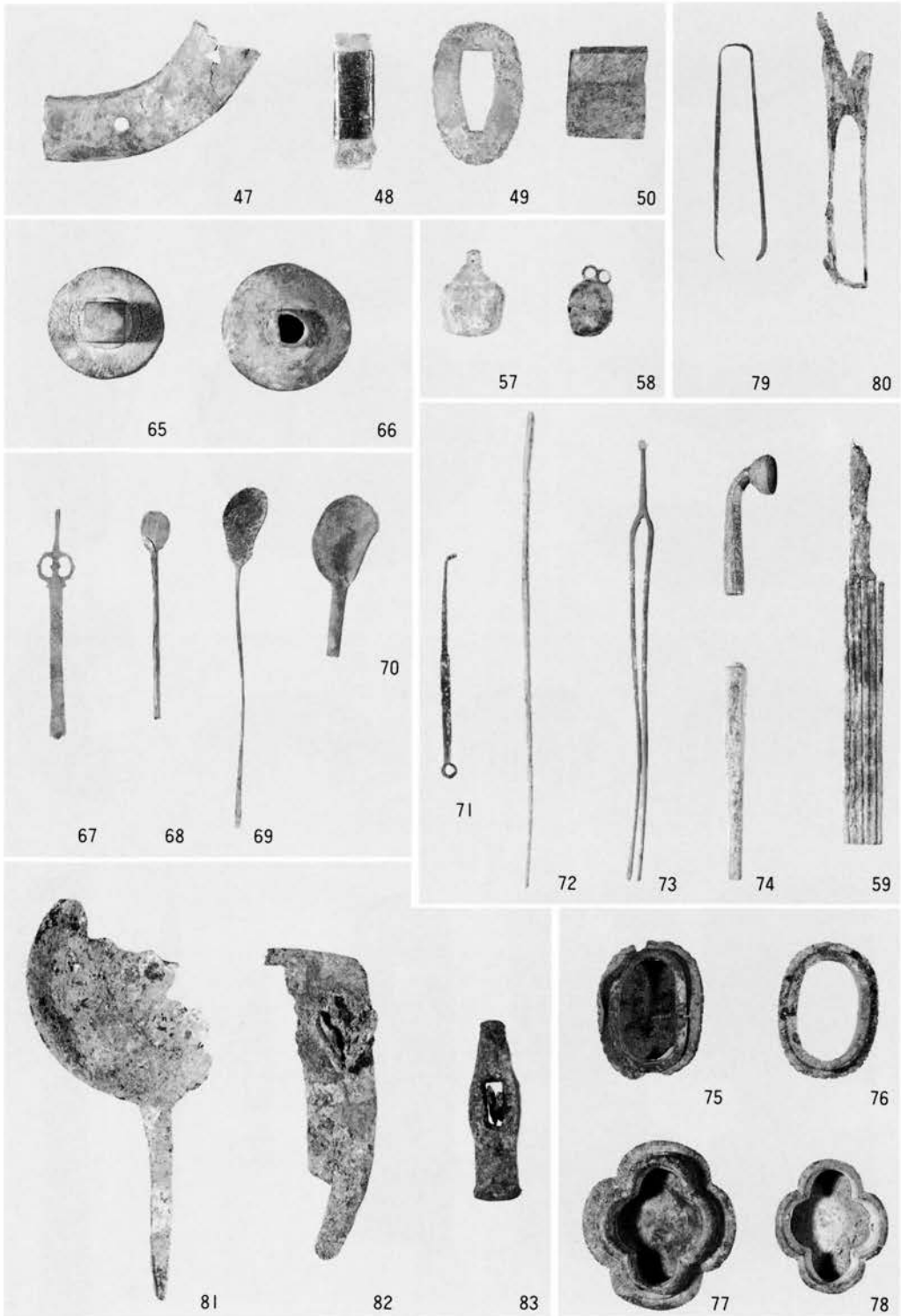
1. 青白磁梅瓶 2・4. 白磁皿(口禿)
7. 白磁印花文皿 8~12. 白磁皿
13~17. 青磁輪花皿



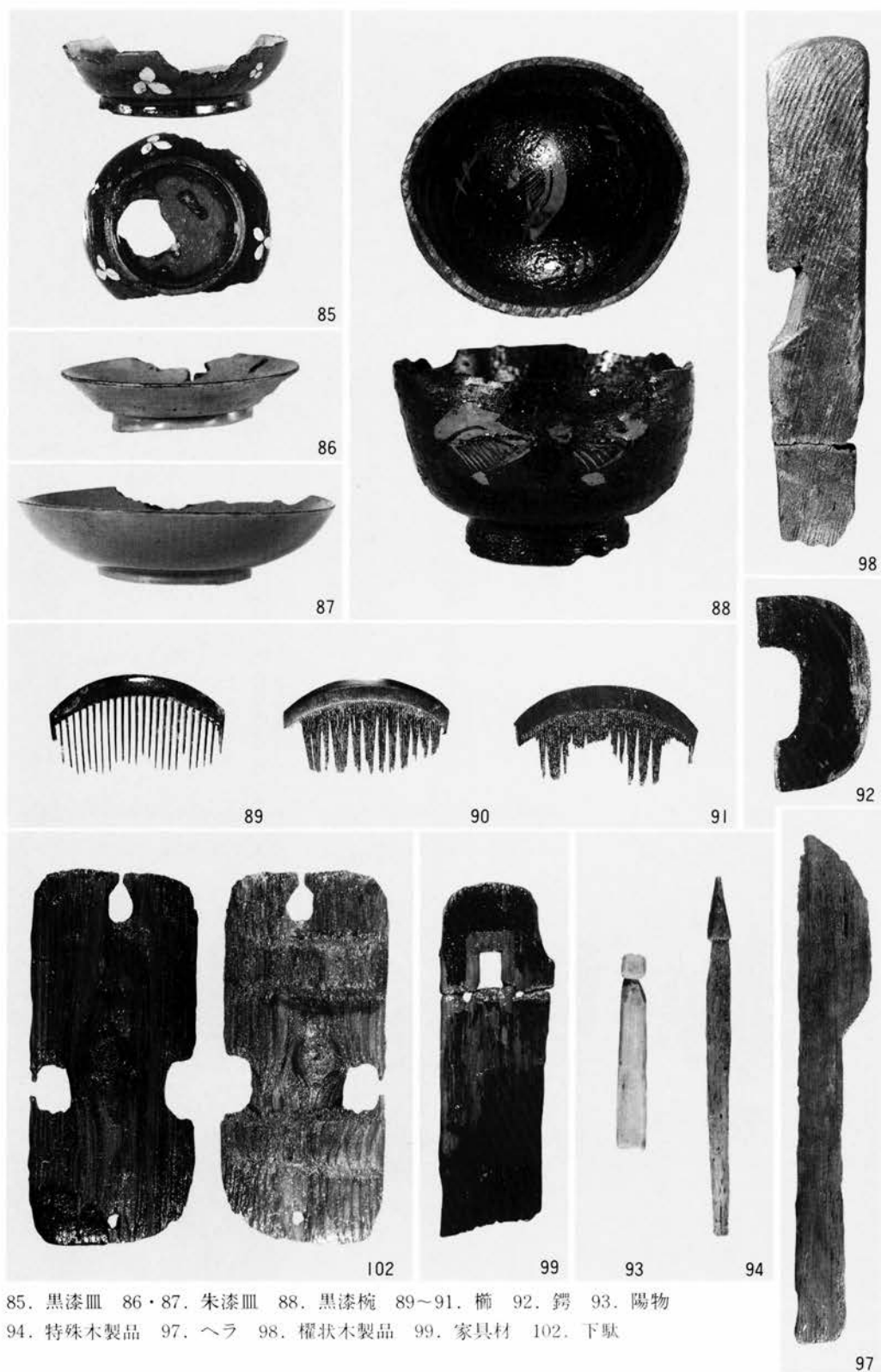
18. 染付皿 19. 天目瓶 20. 青磁片口鉢 21. 同壺 22. 同香炉 23. 同乳鉢 26. 同刻花文盤



30. 越前焼こね鉢 31. 同播鉢 32. 同鉢 33. 同壺 34. 同水指 35・37. 灰釉皿
40. 同仏花瓶 43. 土師質墨書土器 44. 鉄釉碗



47. 甲冑金具 48. 小柄(柄部) 49. 切羽 50. 鏹 57. 銅錘 58. 銅製鈴 59. 小柄
 65. 環付金具 66. 水滴 67. 飾金具(?) 68~70. 匙 71. 鍵 72. 火箸 73. 簪 74. 煙管
 75~78. 家具引手金具 79. 毛拔 80. 鉞 81. 火皿(?) 82. 鉞 83. 金槌





103. 融着した銅銭塊 104. 編布片 105. 炭化紙片



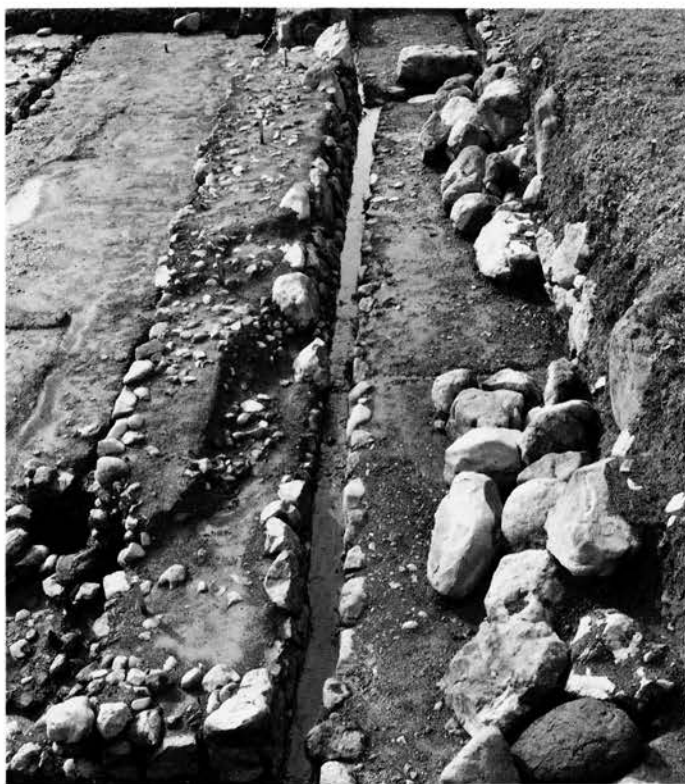
調査区全景 (南から)



道路 S S 2952・3262 (南から)



道路S S 3170 (北から)



道路2952及土塁S A 3184
(北から)



北部小区画群 (東から)



同上 (西から)



区画52-1 (北から)



区画52-6 (東から)



建物 S B 3200 (東から)



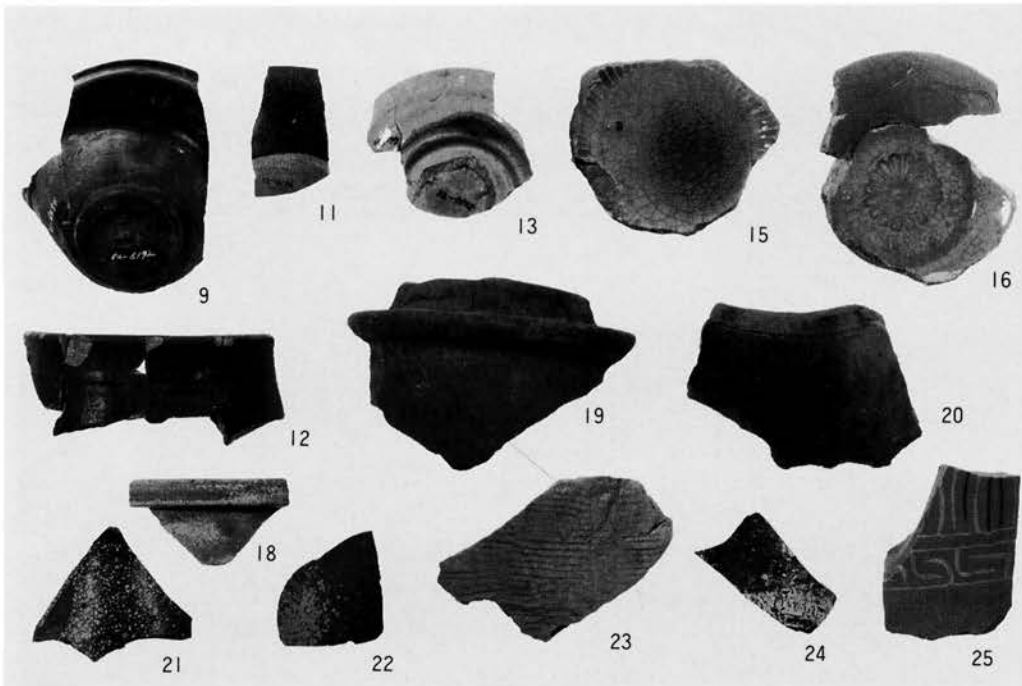
区画52-8 (南から)



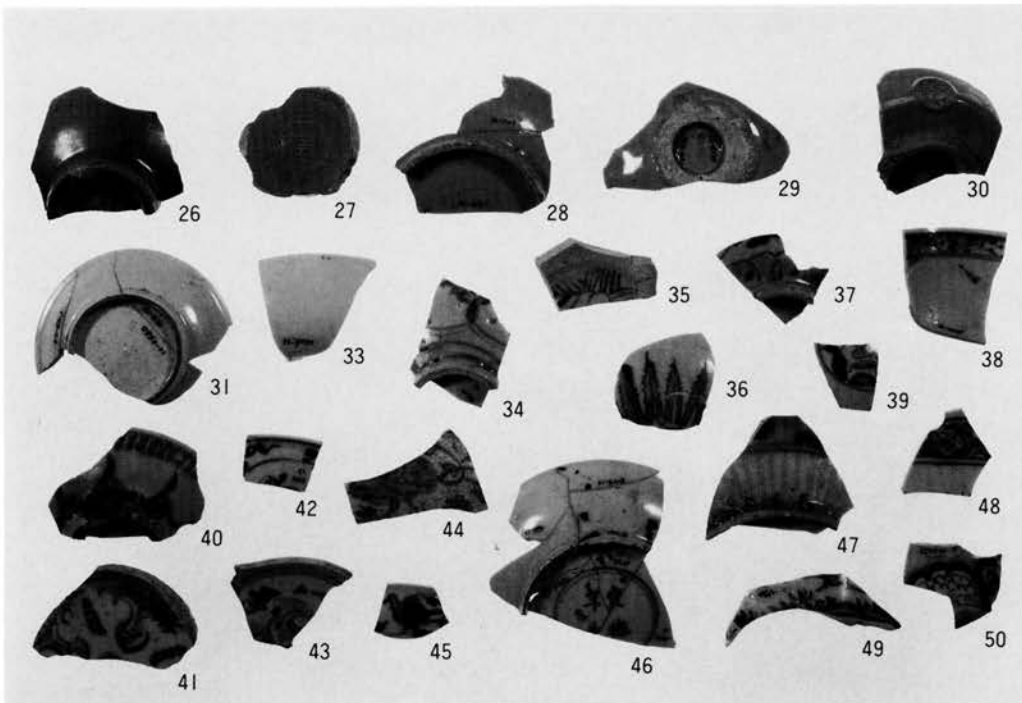
建物S B3203 (東から)



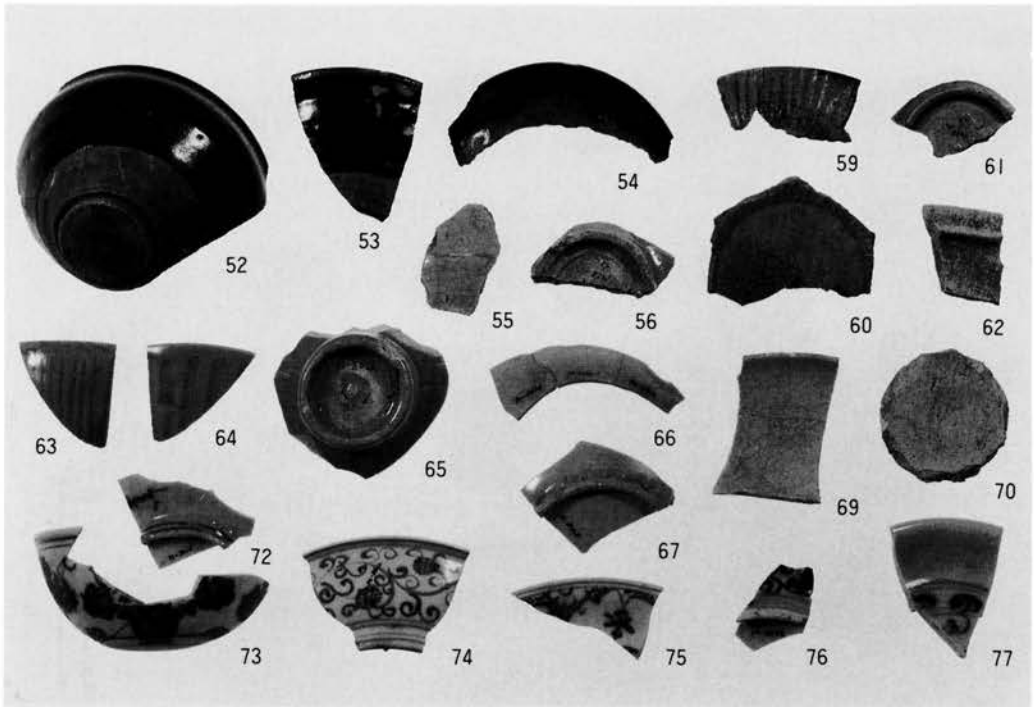
門S I 3189 (西から)



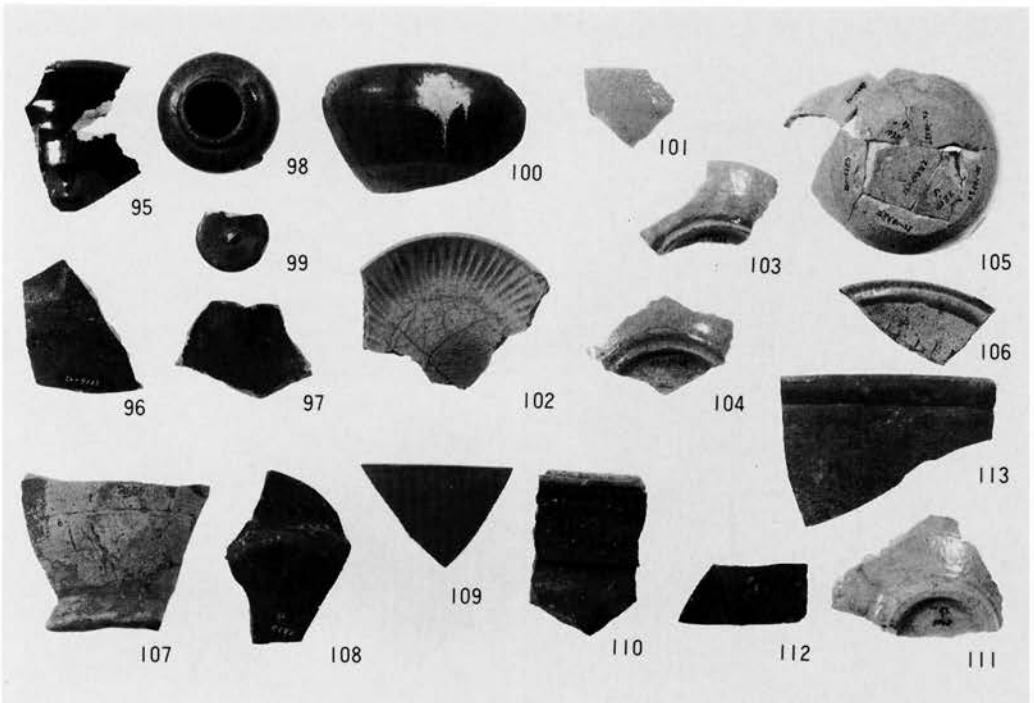
区画52-8 グループI 9・11. 天目茶碗 12. 鉄釉壺 13・15・16. 灰釉皿 18. 灰釉壺
19. 土師質羽釜 20. 瓦質火鉢 21・22. 備前 23. 珠州 24. ソバ茶碗 25. 象嵌青磁壺



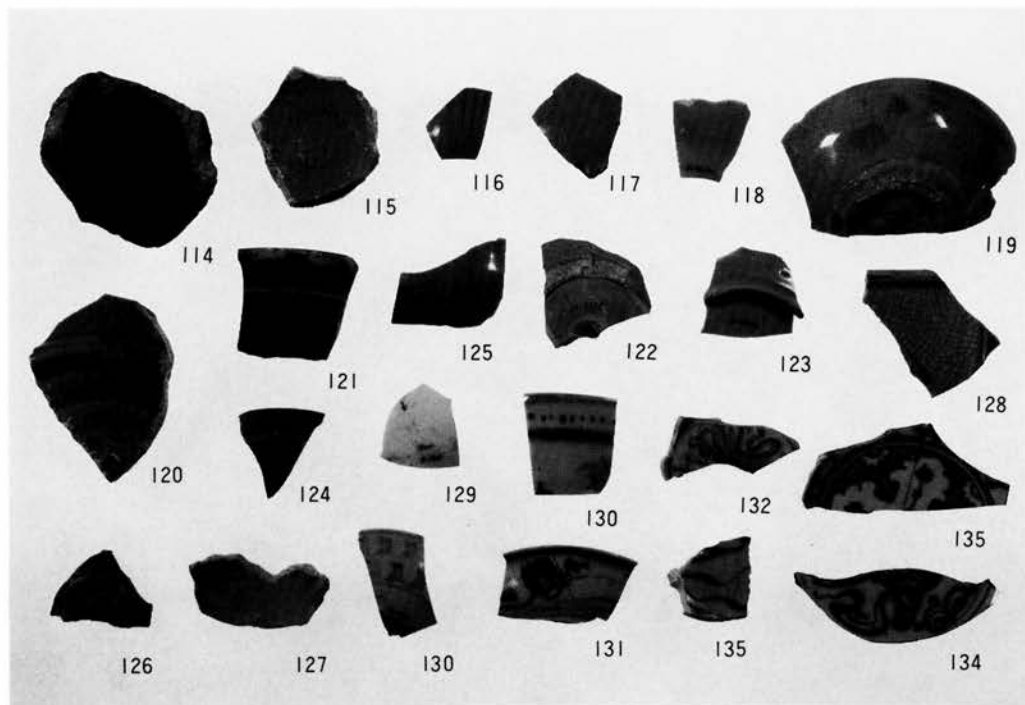
区画52-8 グループI 26・27. 青磁碗 28・29. 青磁皿 30. 青磁香炉 31・33. 白磁皿
34~39. 染付碗 40~47. 染付皿 48~50. 染付鉢



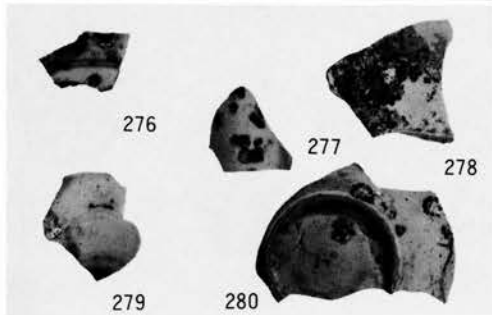
区画52-8 グループII 52・53. 天目茶碗 54. 鉄釉皿 55・56. 灰釉碗 59~61. 灰釉皿
62. 灰釉鉢 63~65. 青磁碗 66・67. 青磁皿 69・70. 白磁碗 72・73. 染付碗 74~77. 染付皿



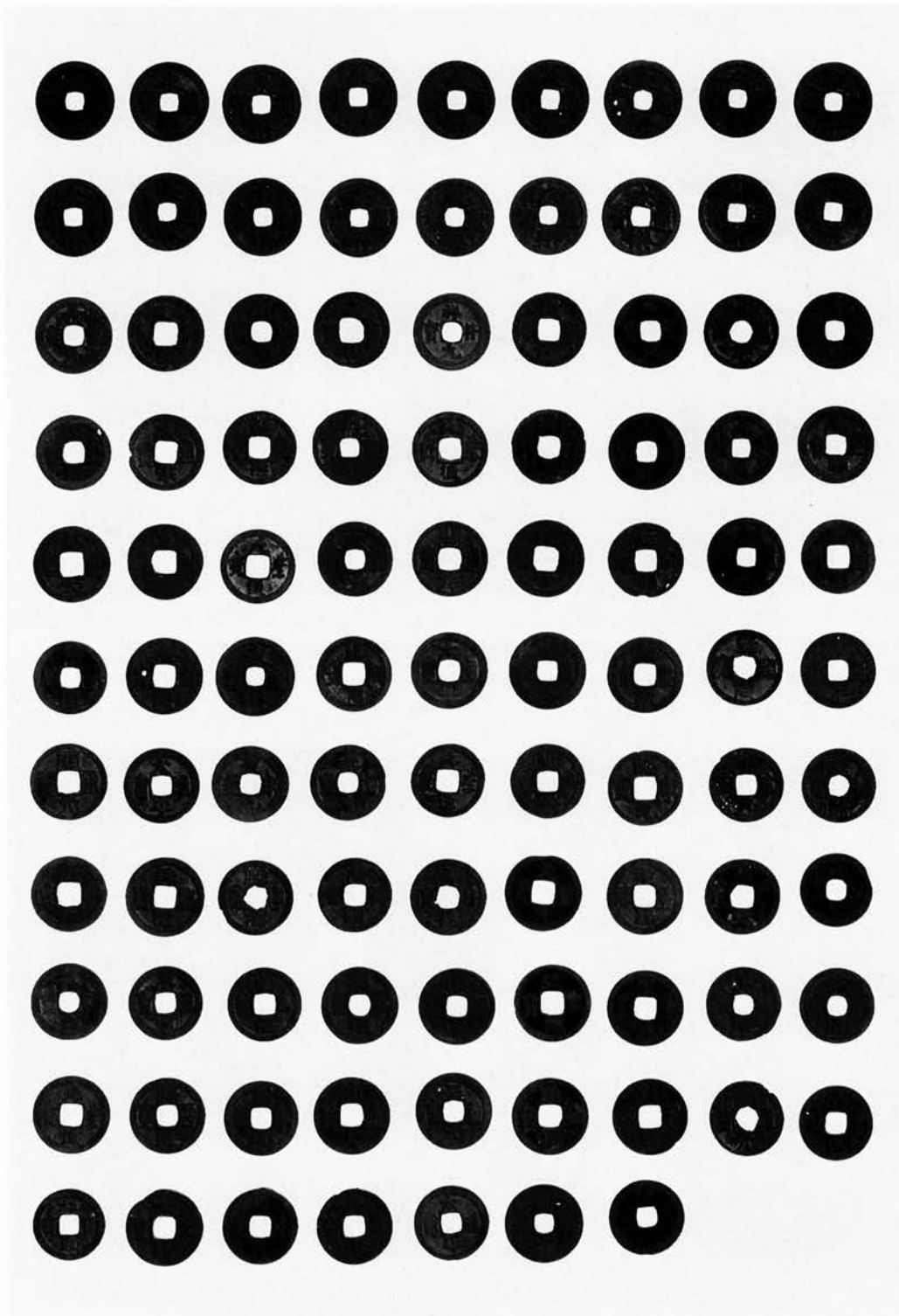
区画52-7 グループI 95. 天目茶碗 96・97. 鉄釉碗 98・100. 鉄釉小壺 99. 鉄釉蓋
101. 灰釉碗 102~104. 灰釉皿 105. 灰釉小壺 106. 卸皿 107. 灰釉壺 108. 備前 110. 常滑
111. 朝鮮製碗 112・113. 朝鮮製鉢



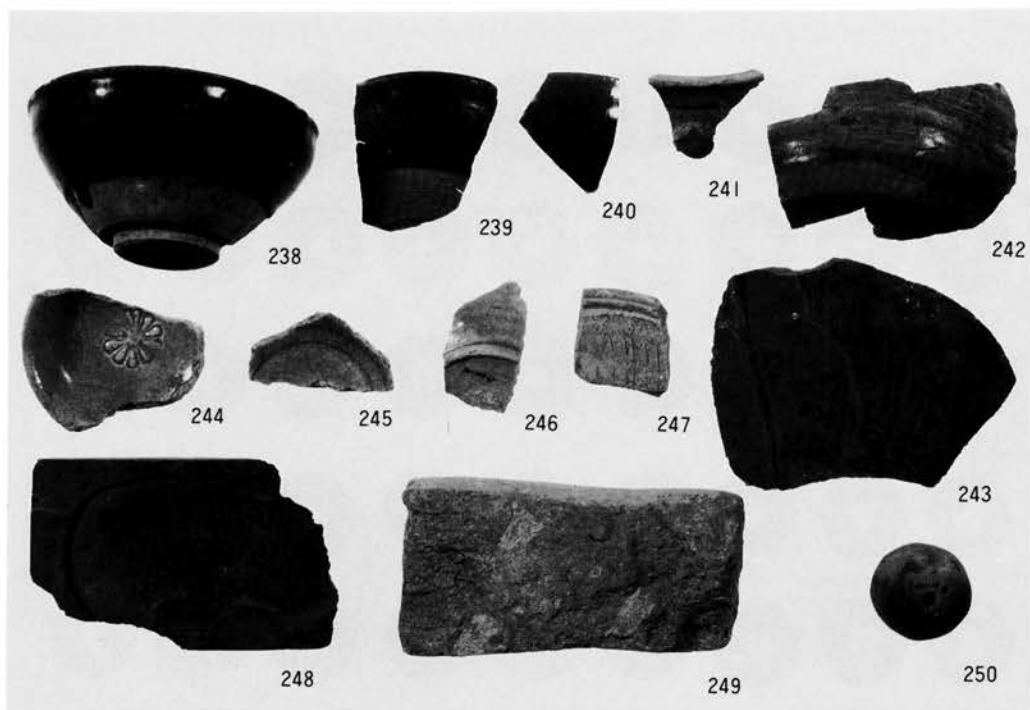
区画52-7 グループ I 114~116. 青磁碗 117~119. 青磁皿 120~124. 青磁鉢 125. 青磁花生
126. 青磁香炉 127. 青磁杯 129. 白磁皿 130. 染付碗 131~135. 染付皿



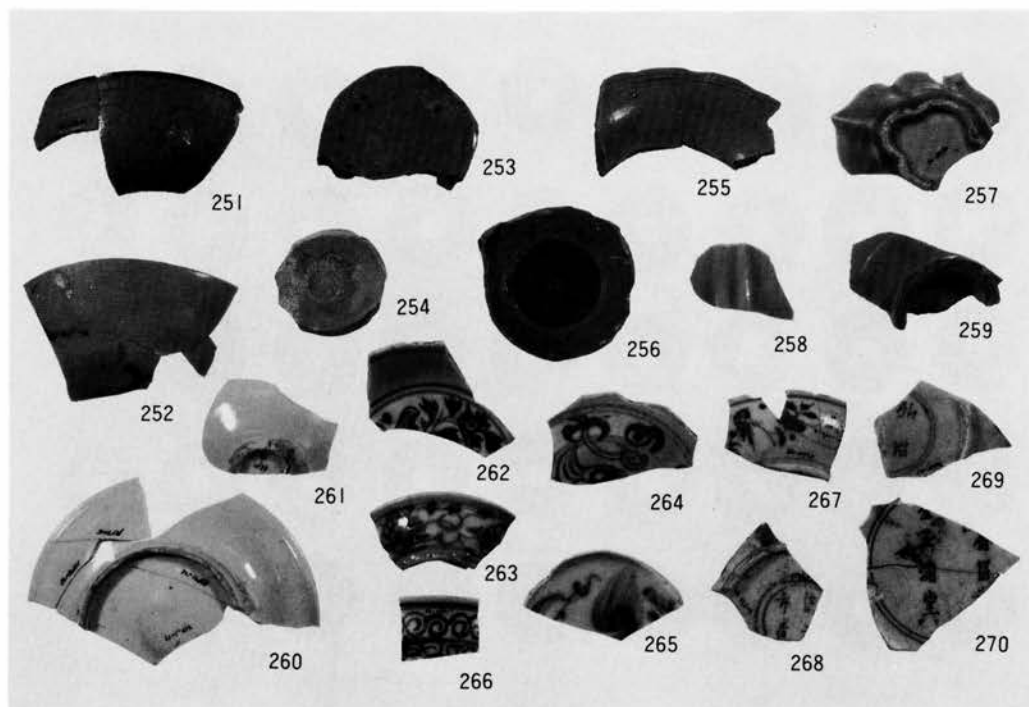
区画52-7 グループ II 94. 越前播鉢 234. 越前壺
276. ~280. 金属分が付着した皿



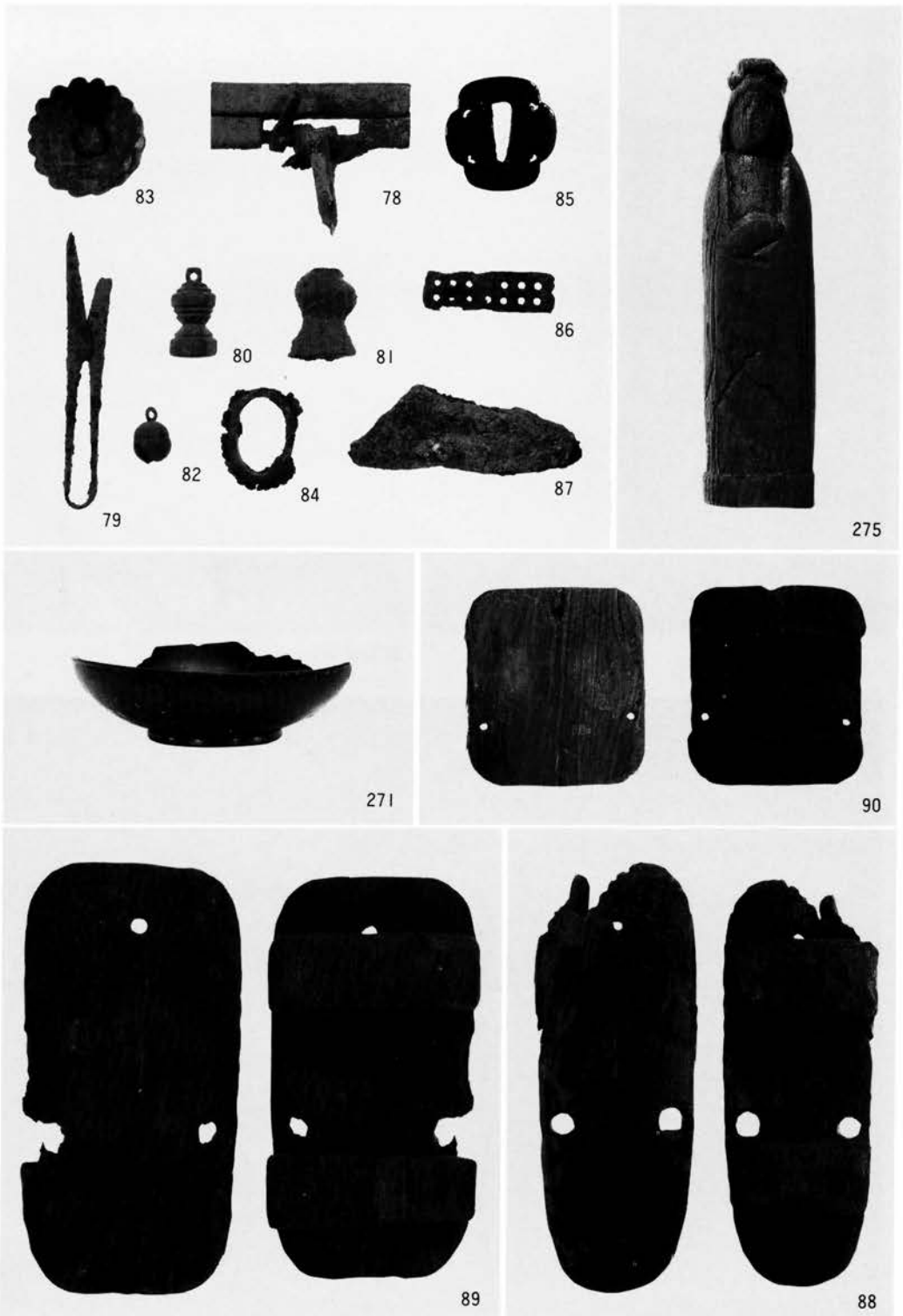
S X 3229出土の銅銭の一差し



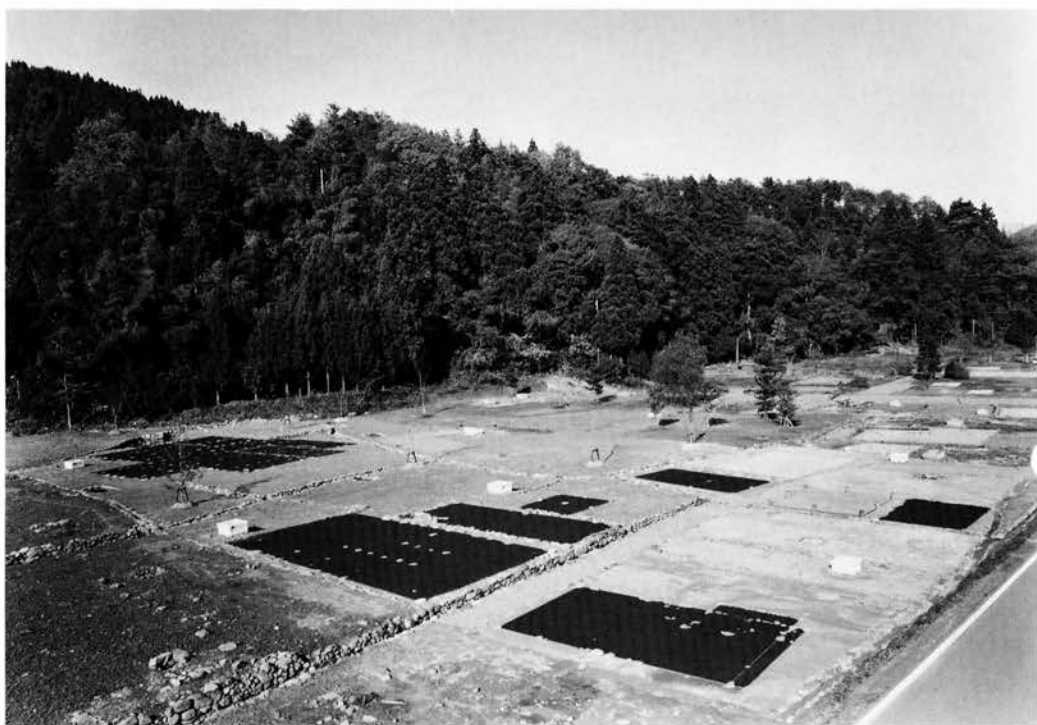
52-町屋地区 グループ I 238~240. 天目茶碗 241~243. 鉄釉壺 244~246. 灰釉皿
247. 灰釉卸皿 248. 硯 249. 砥石 250. 不明



52-町屋地区 グループ I 251~254. 青磁碗 255・256. 青磁皿 257・258. 青磁杯
259. 青磁香炉 260・261. 白磁皿 262~270. 染付皿



金属製品 78. 錠前 79. 鋏 80・81. 錘 82. 鈴 83. 紅皿 84. 引手 85. 切羽 86. 小札
87. 火打鎌 木製品 271. 漆杯 275. 小仏像 88・89. 下駄



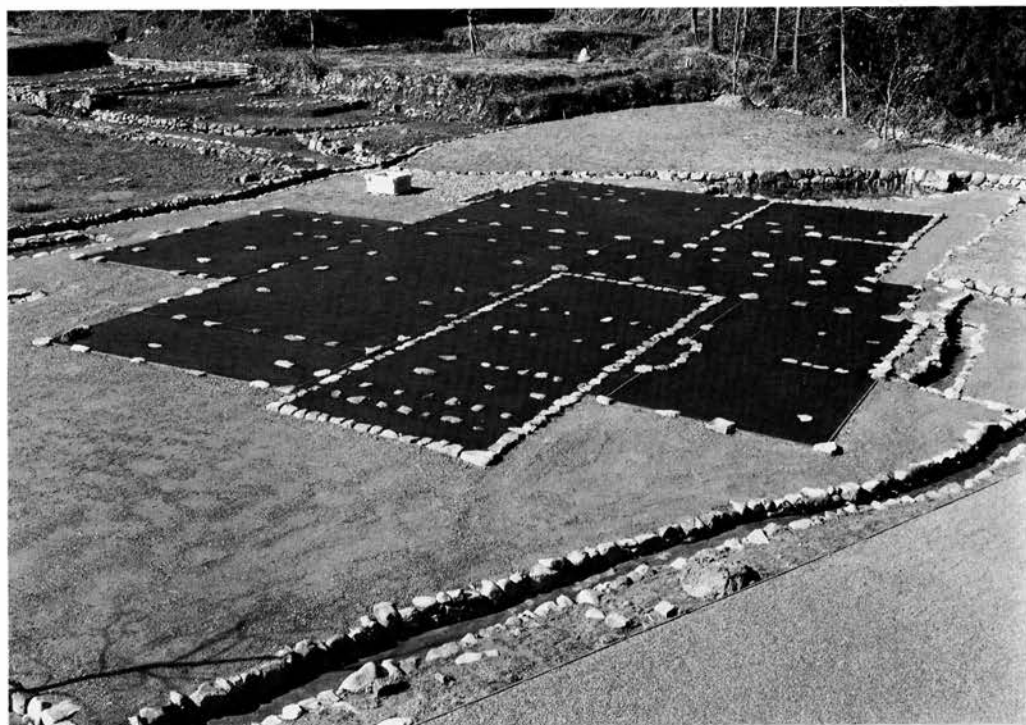
整備区全景 (東南から)



整備区全景 (東から)



整備区西半建物群 (南から)



同 上 (北東から)



各種建物整備状況 (東から)



整備区東半町屋群 (南から)



▲平置型説明板



◀立置型説明板

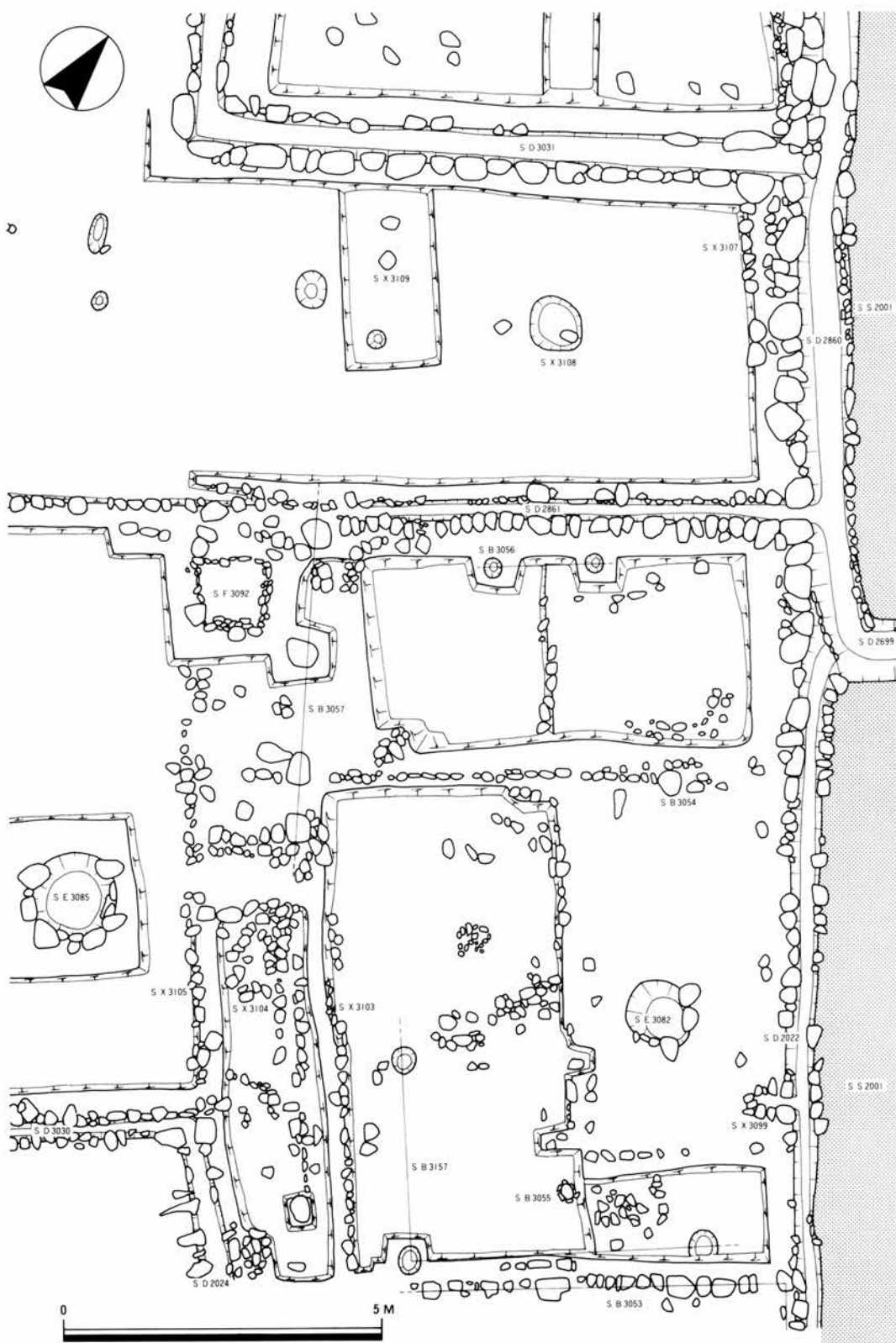
第1図

発掘調査・環境整備位置図



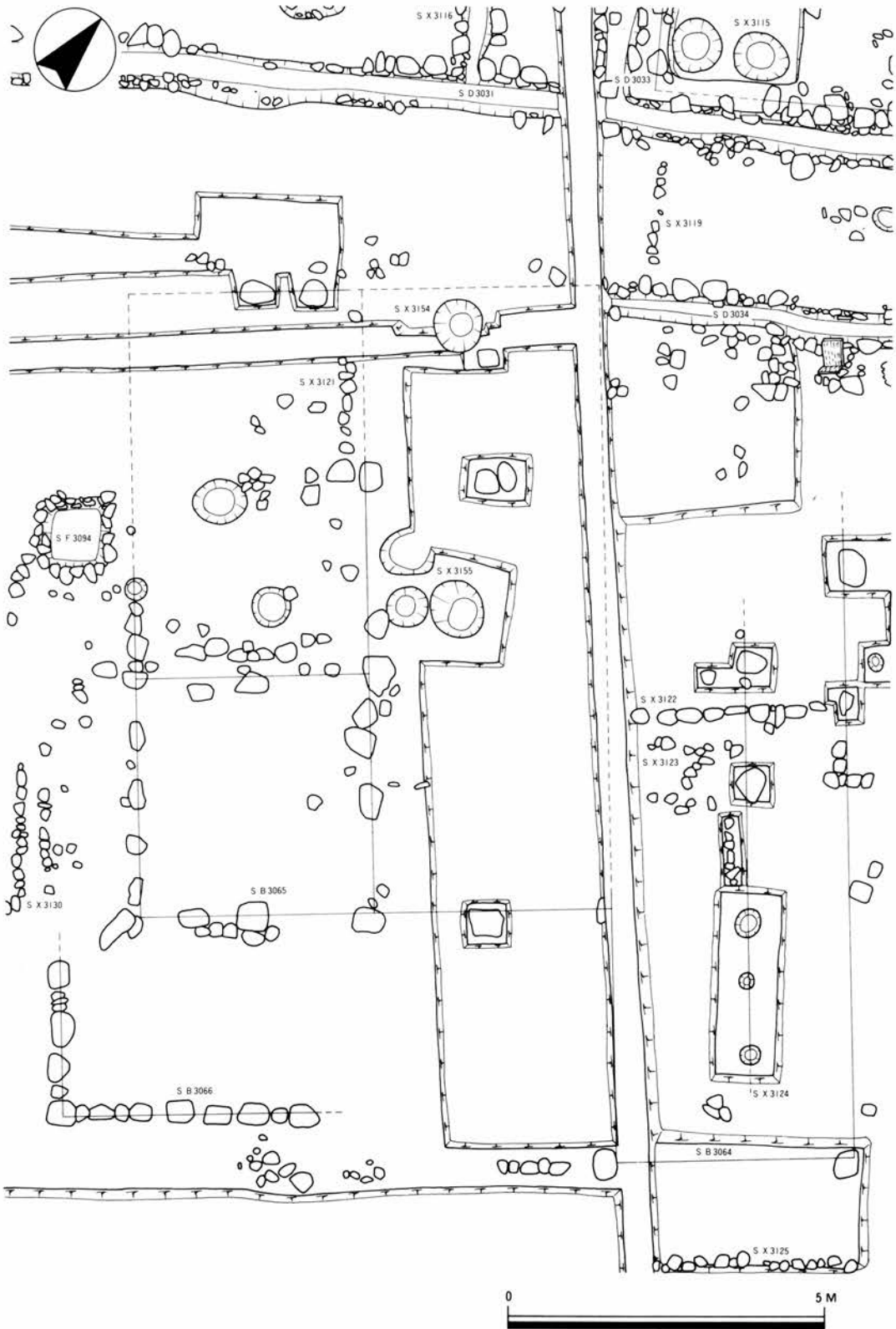


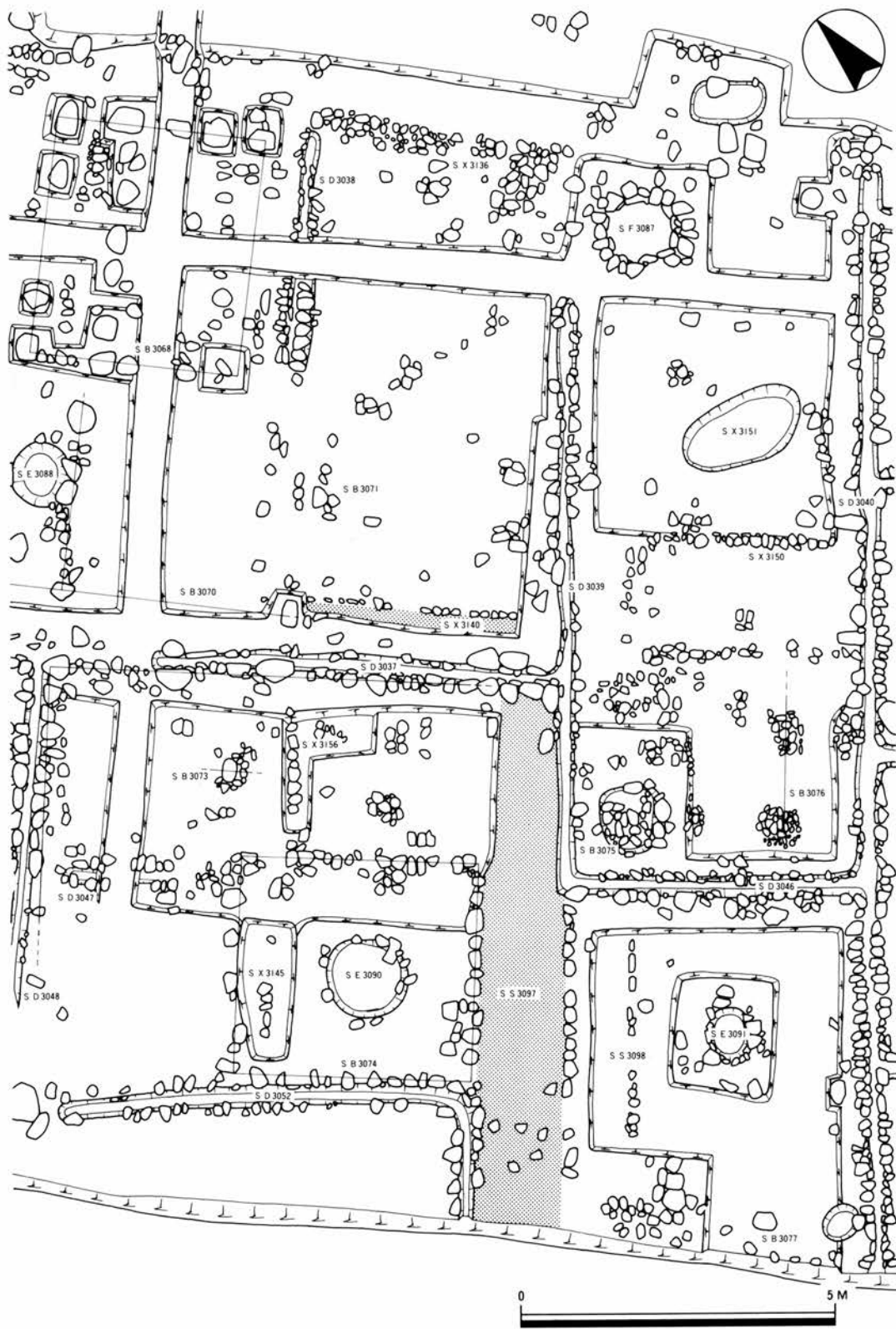
第3図



第4図

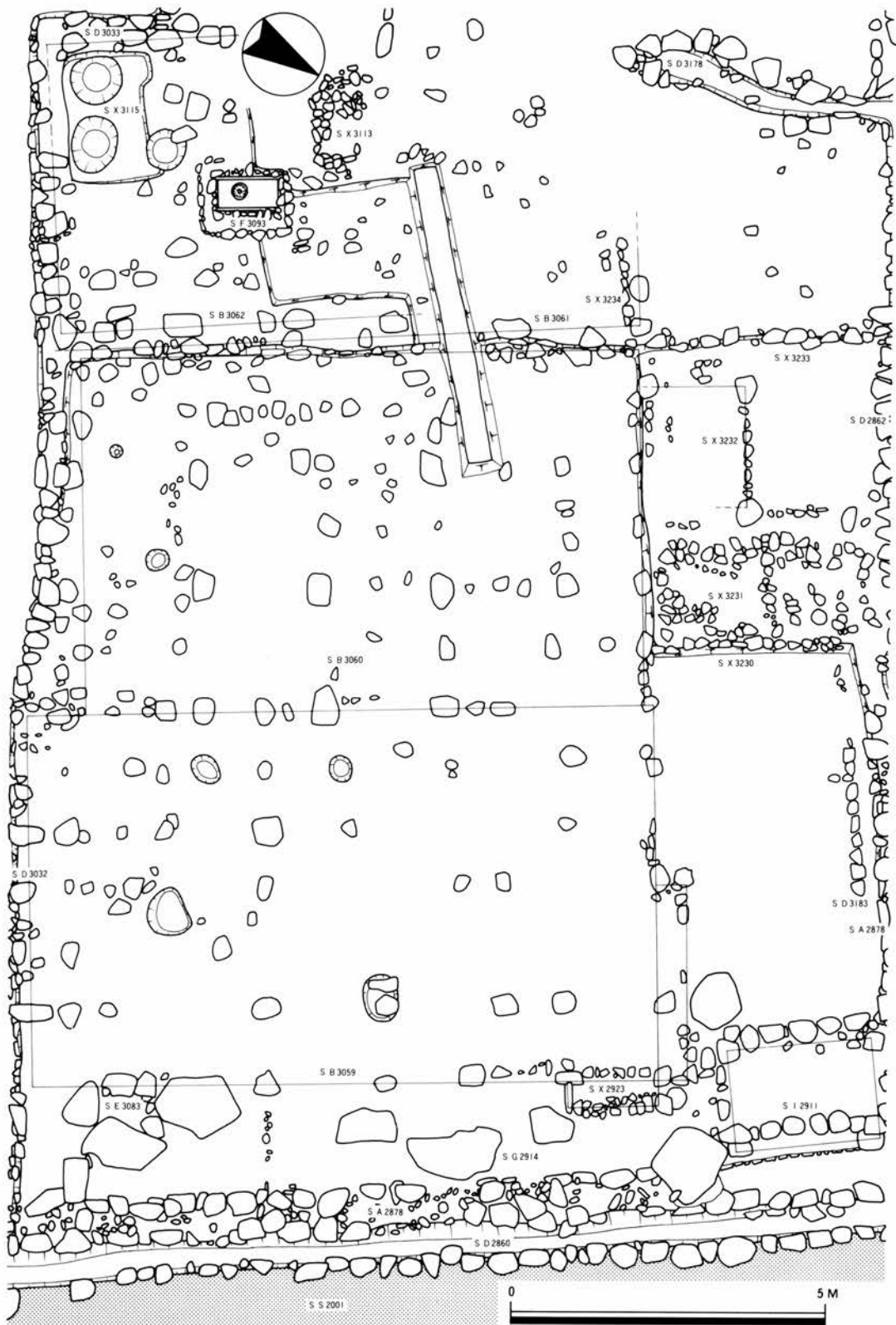
第51次調査・遺構(2)

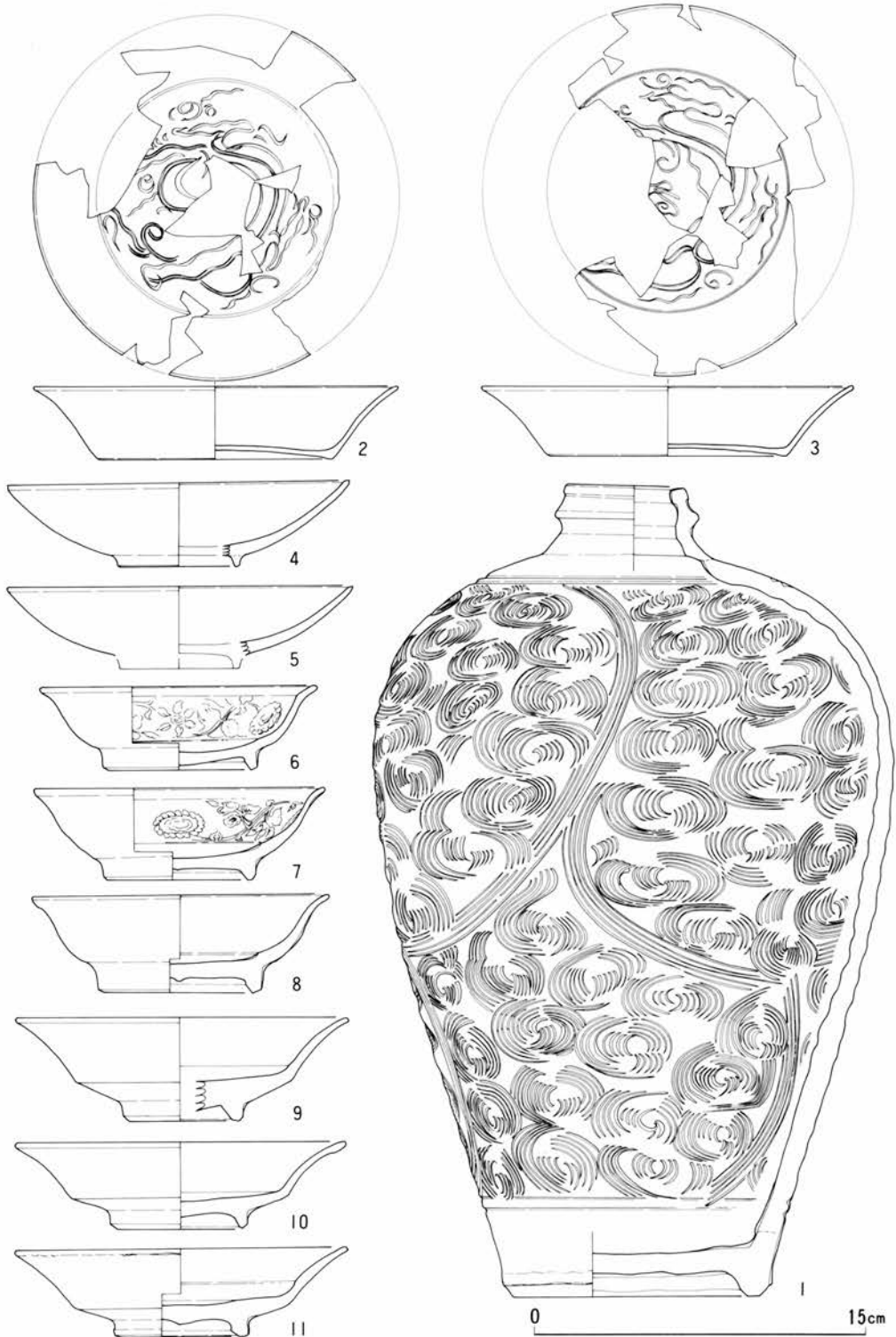




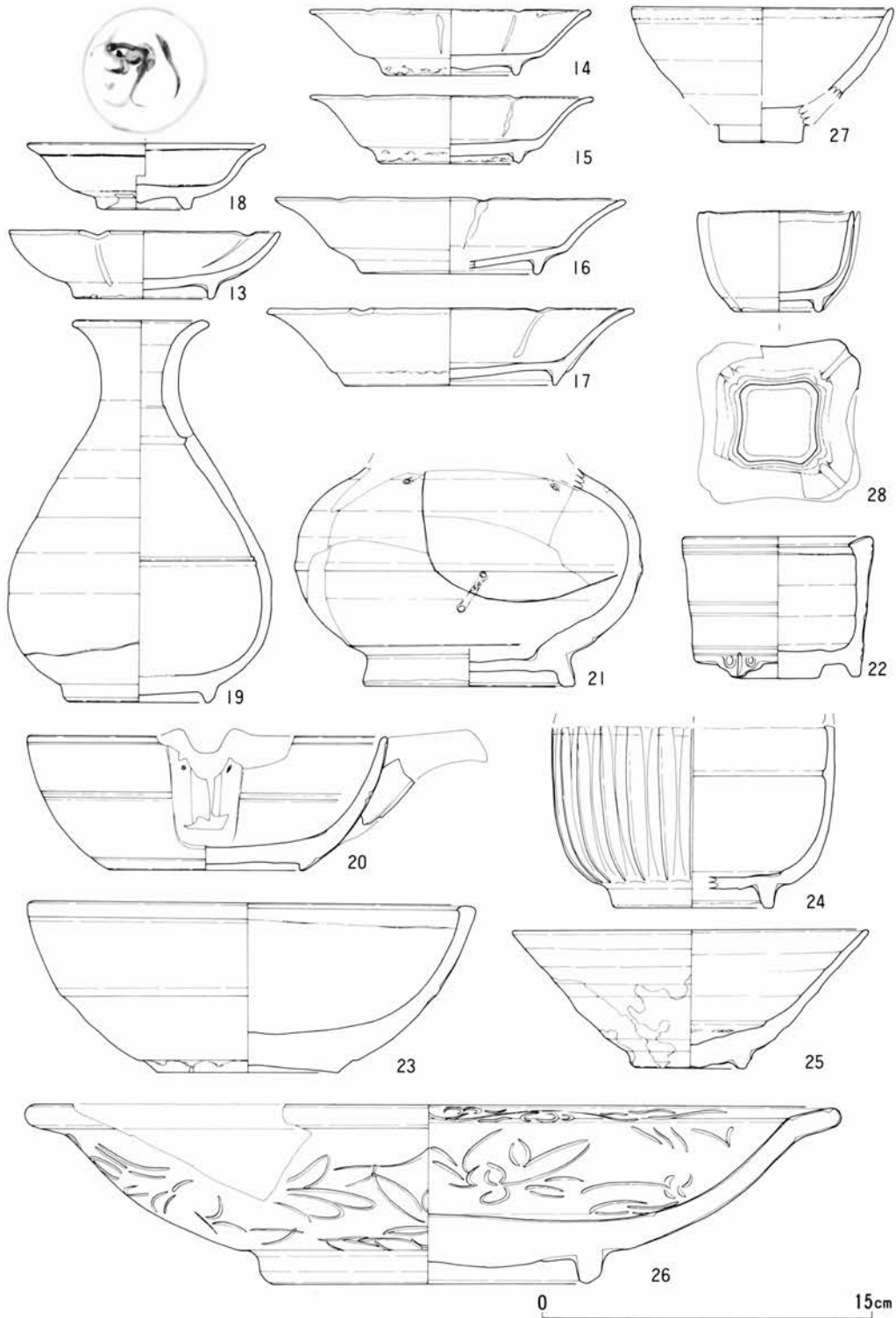
第6図

第51次調査・遺構(4)

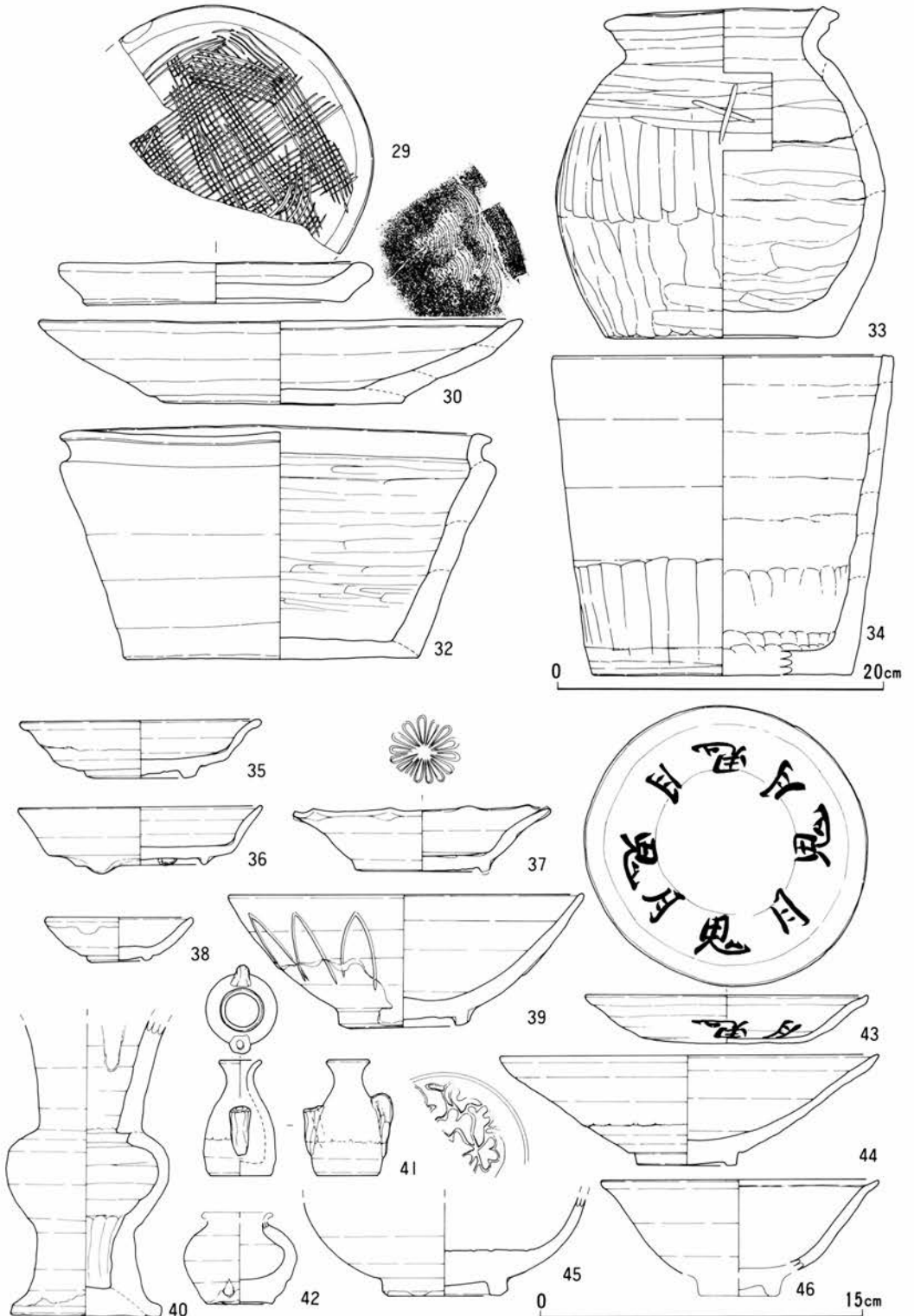




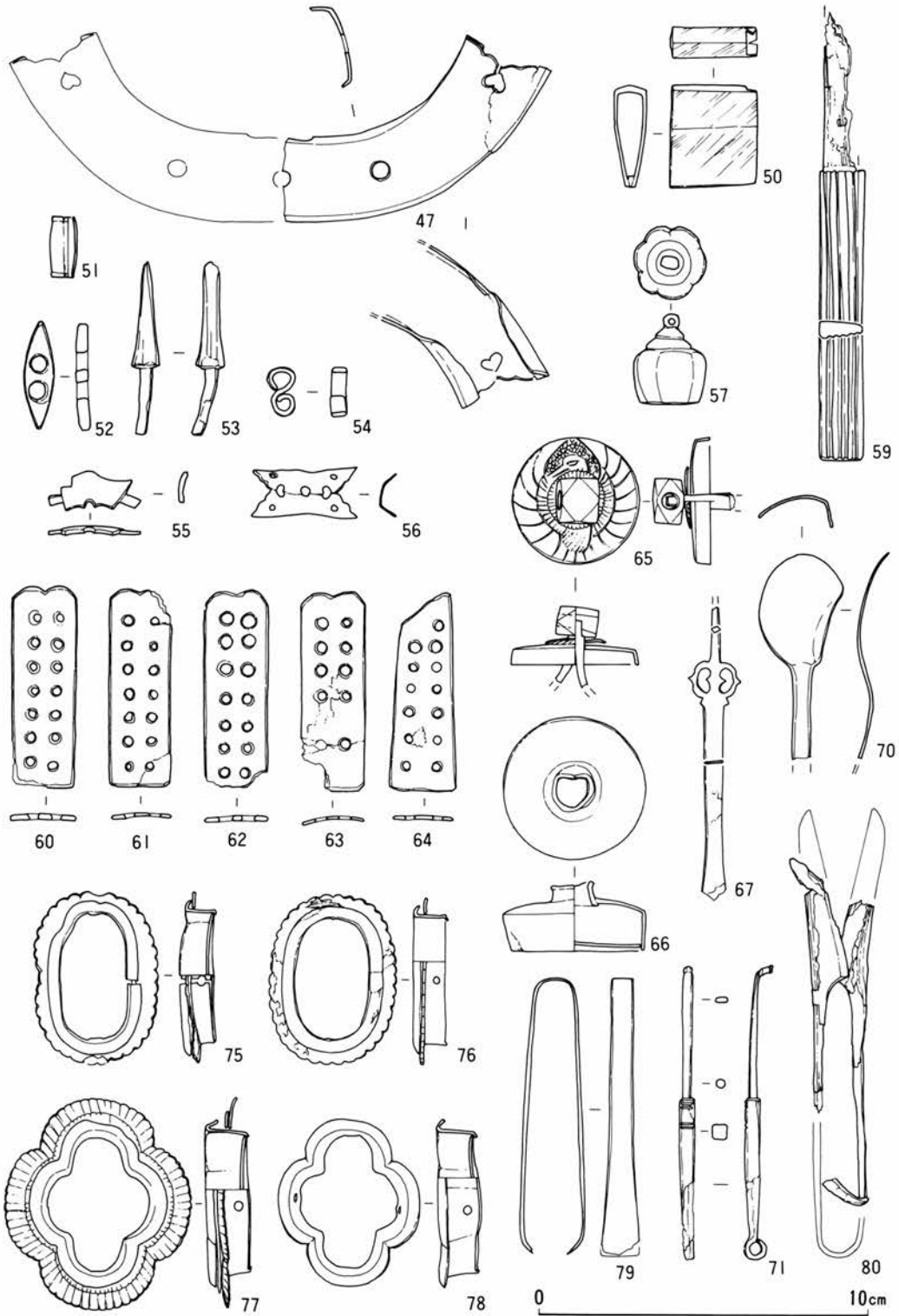
1. 青白磁梅瓶 2~5. 白磁皿(口禿) 6・7. 印花文皿 8~11. 白磁皿



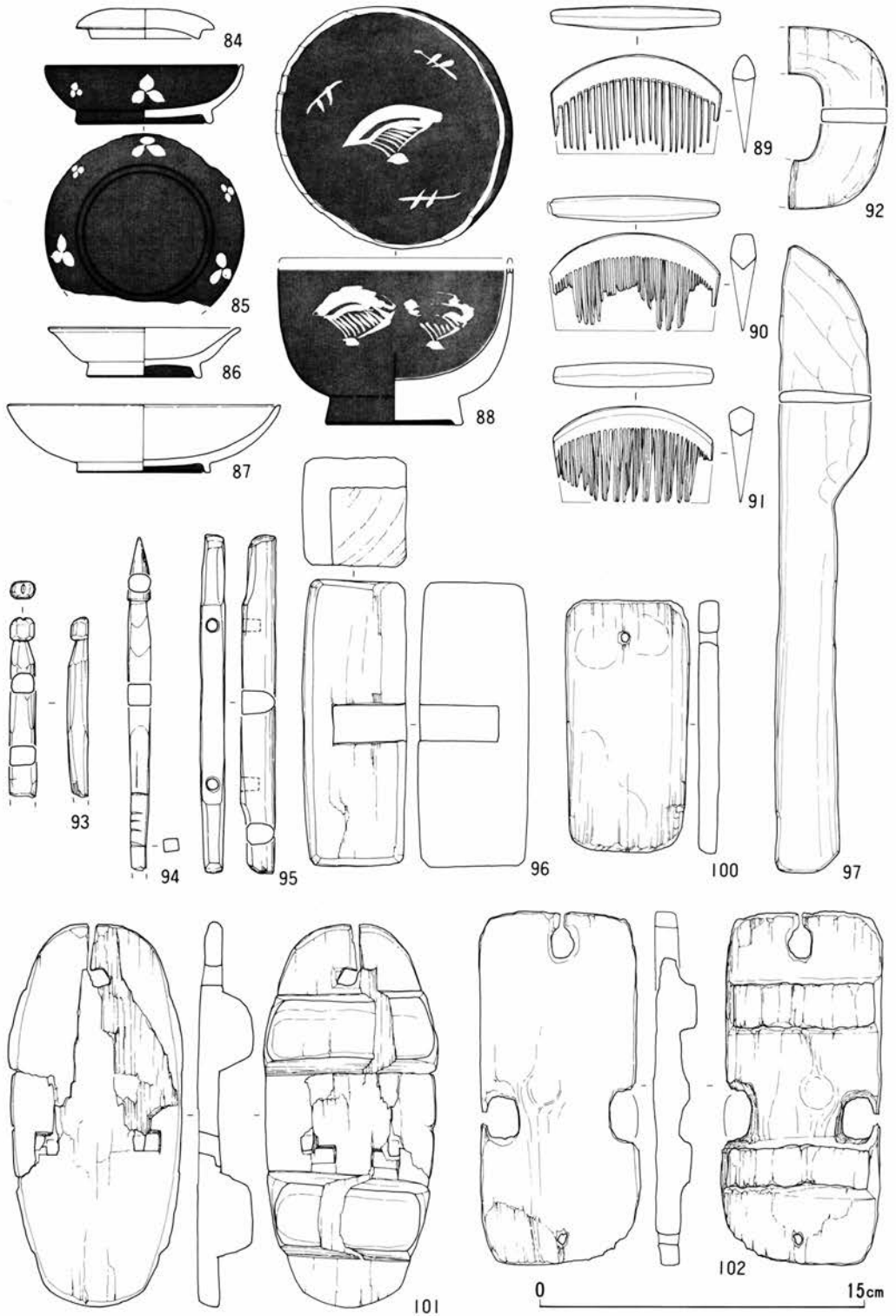
13~17. 青磁輪花皿 18. 染付皿 19. 天目瓶 20. 青磁片口鉢 21. 同壺 22. 同香炉
 23. 同乳鉢 24. 同鑄文壺 25. 朝鮮製碗 26. 青磁刻花文盤 27. 黒釉碗 28. 青磁小鉢



29. 越前焼卸皿 30. 同こね鉢 32. 同鉢 33. 同壺 34. 同水指 35~37. 灰釉皿
 38. 鉄釉小皿 39. 灰釉碗 40. 同仏花瓶 41. 鉄釉水滴 42. 灰釉水滴 43. 土師質墨書土器
 44. 鉄釉碗 45. 白磁印花文碗 46. 白磁碗(口禿)

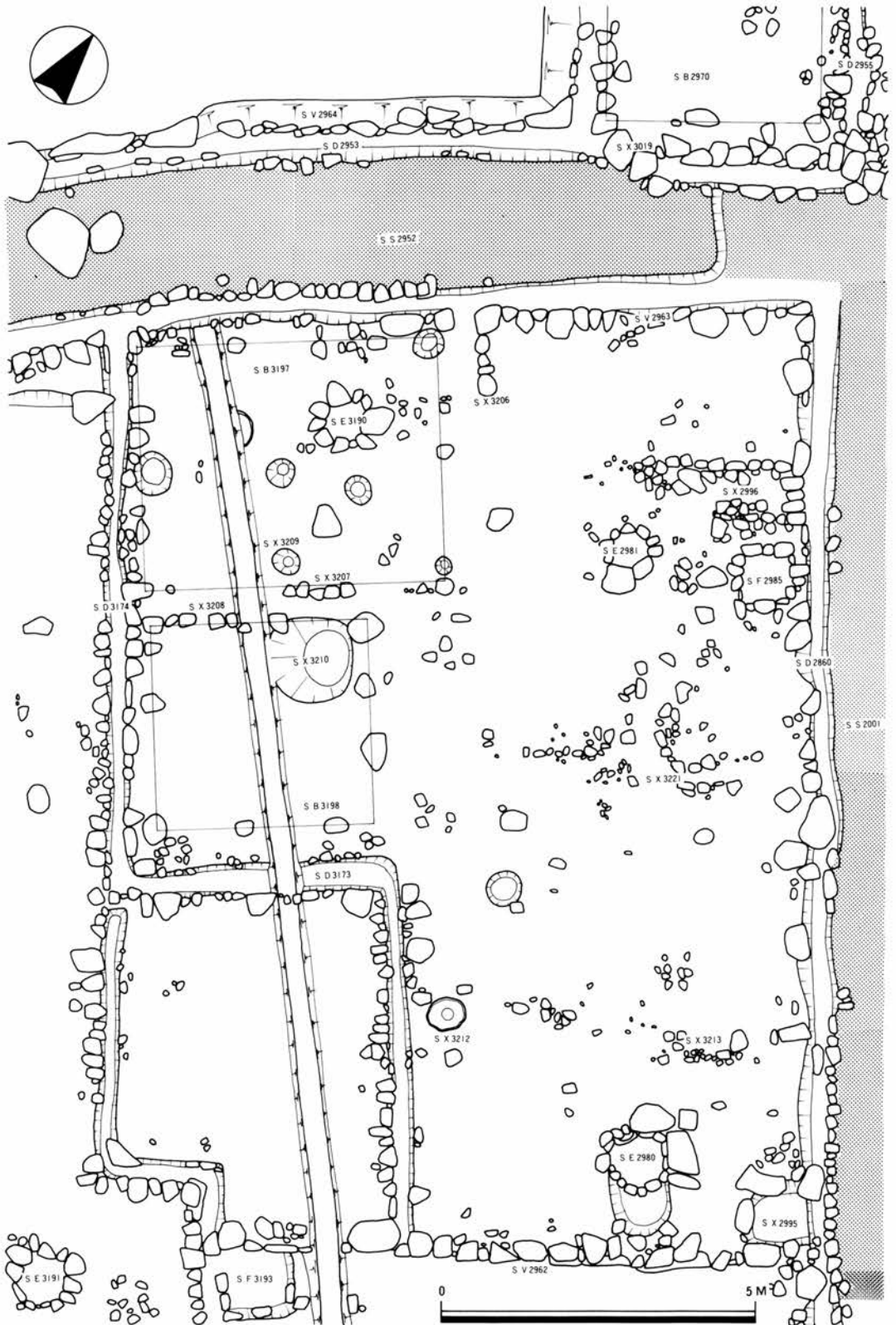


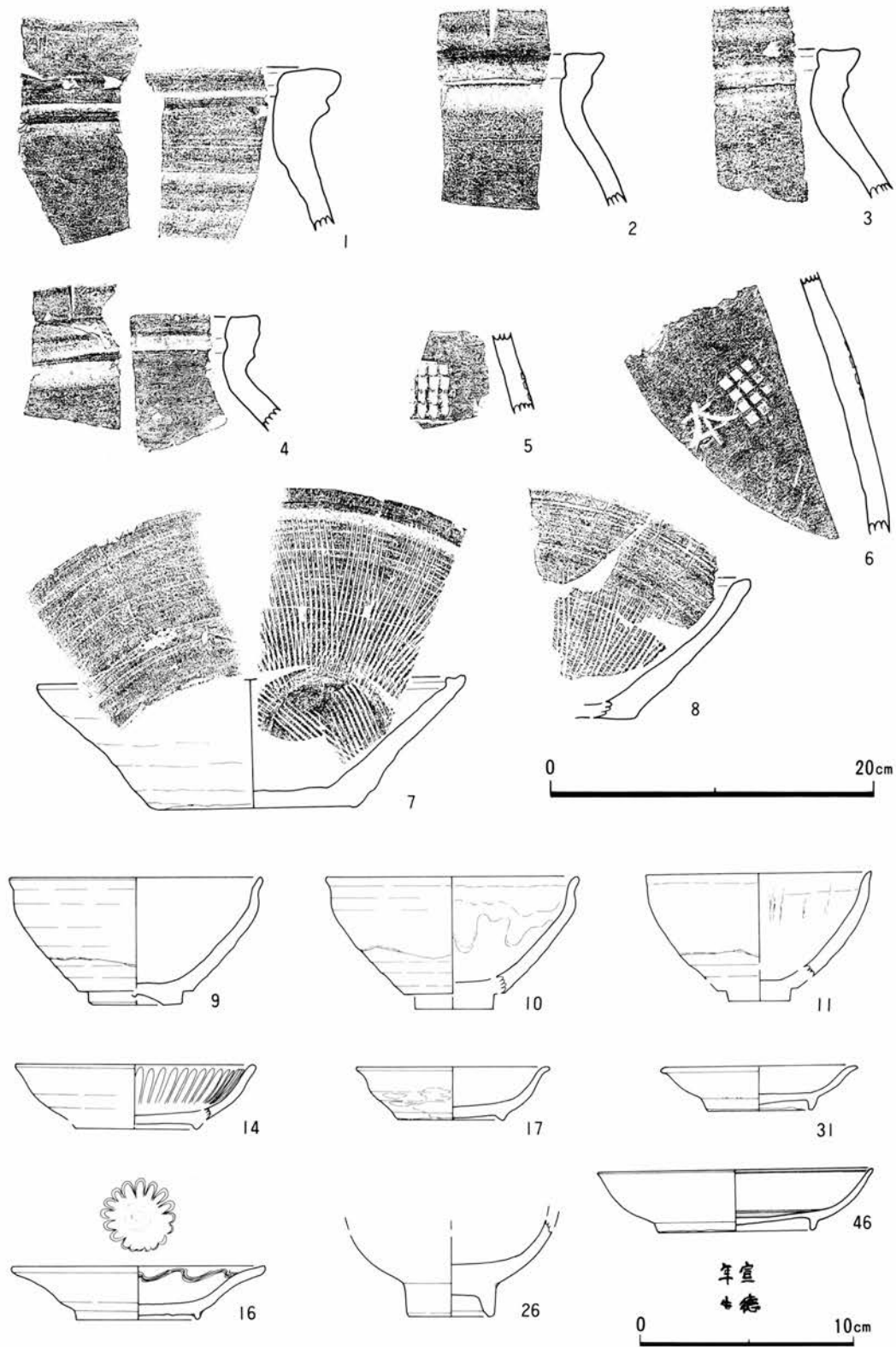
47. 甲冑金具 50. 錙 51. 筒形金具 52. 鞆 53. 鉄鏃 54. S字金具 55. 目貫(?)
 56. 飾金具 57. 銅錘 59. 小柄 60~64. 小札 65. 鑲付金具 66. 水滴 67. 飾金具(?)
 70. 匙 71. 鍵 75~78. 家具引手金具 79. 毛拔 80. 鉞



84. 蓋 85. 黒漆皿 86・87. 朱漆皿 88. 黒漆碗 89~91. 木節 92. 鏝 93. 陽物
 94. 特殊木製品 95. 糸巻(?) 96. 用途不明木製品 97. ヘラ 100~102. 下駄



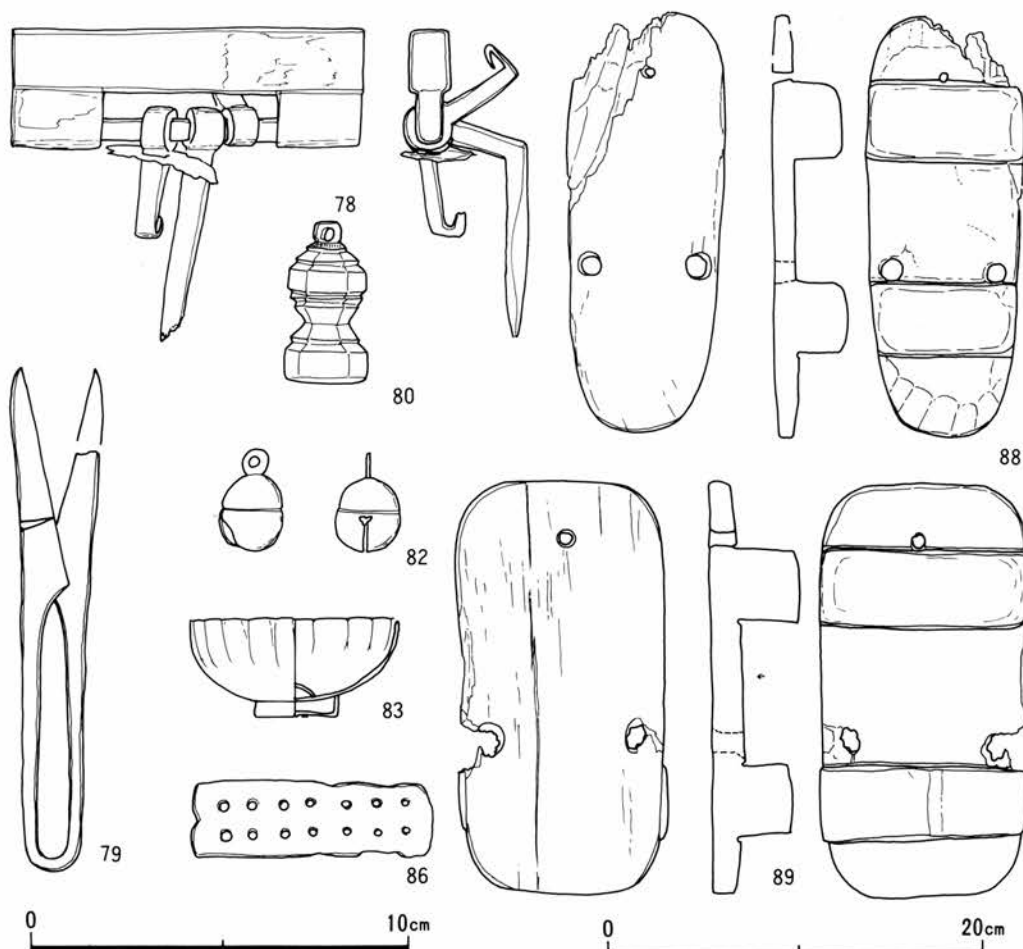
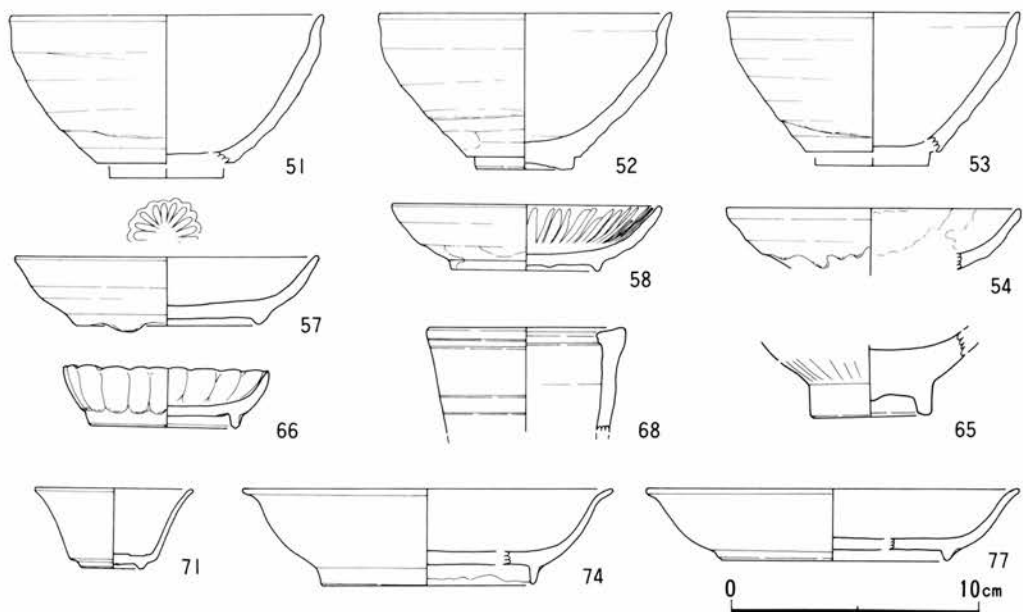




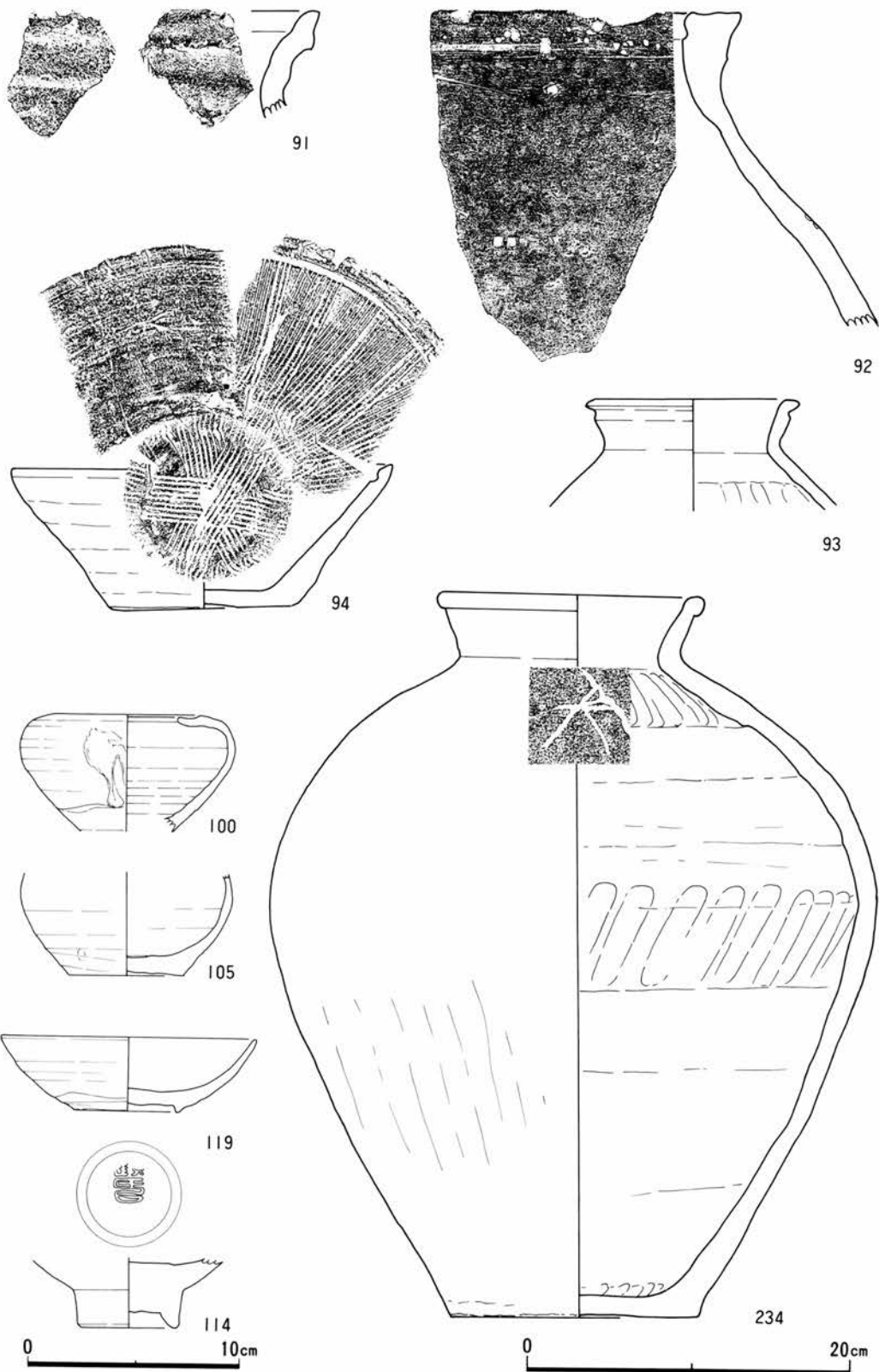
区画52-8 グループI 1~6, 越前焼甕 7・8, 越前焼播鉢 9~11, 天目茶碗
 14・16・17, 灰釉皿 26, 青磁碗 31, 白磁皿 46, 染付皿

第15図

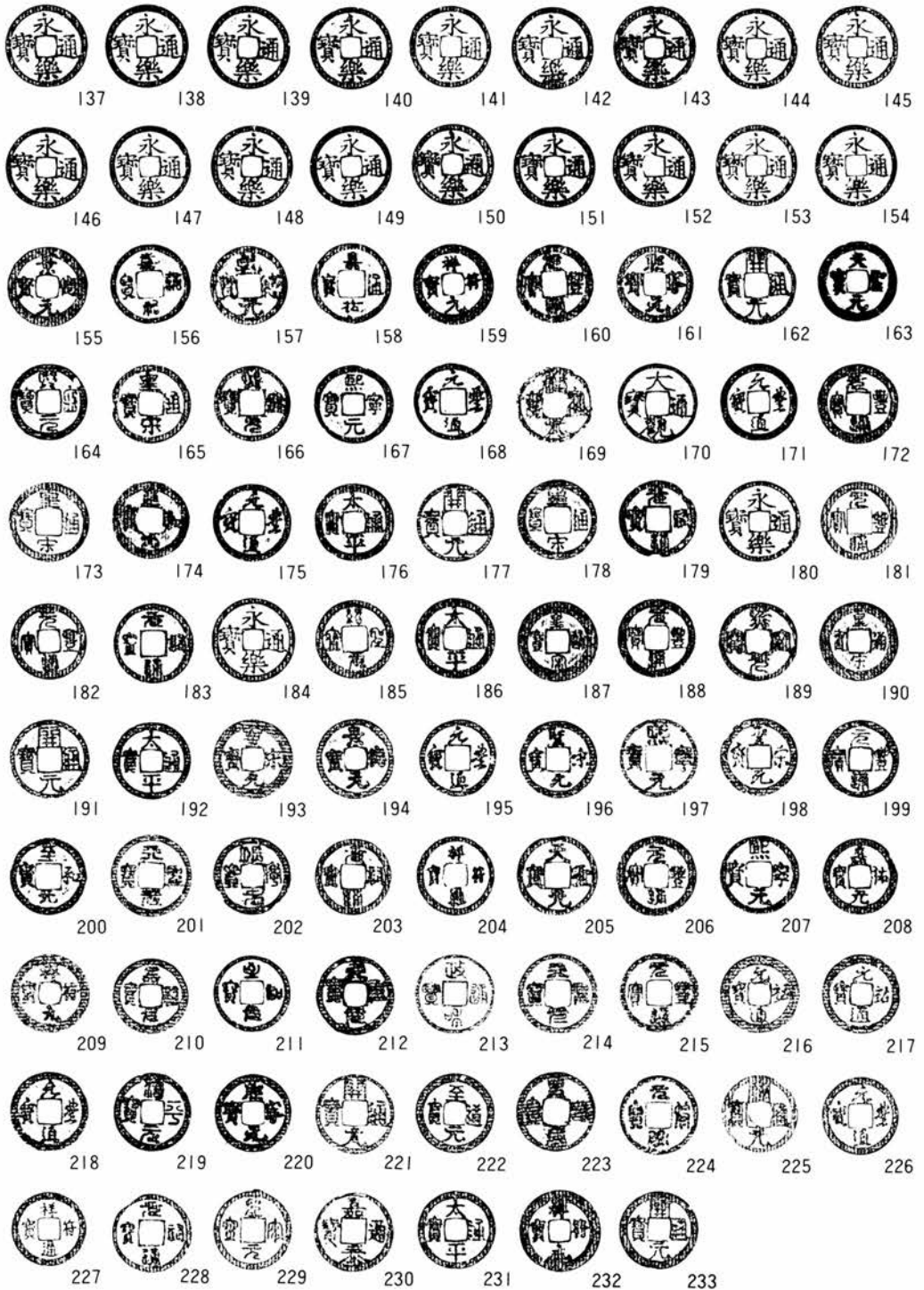
第52次調査・遺物(2)



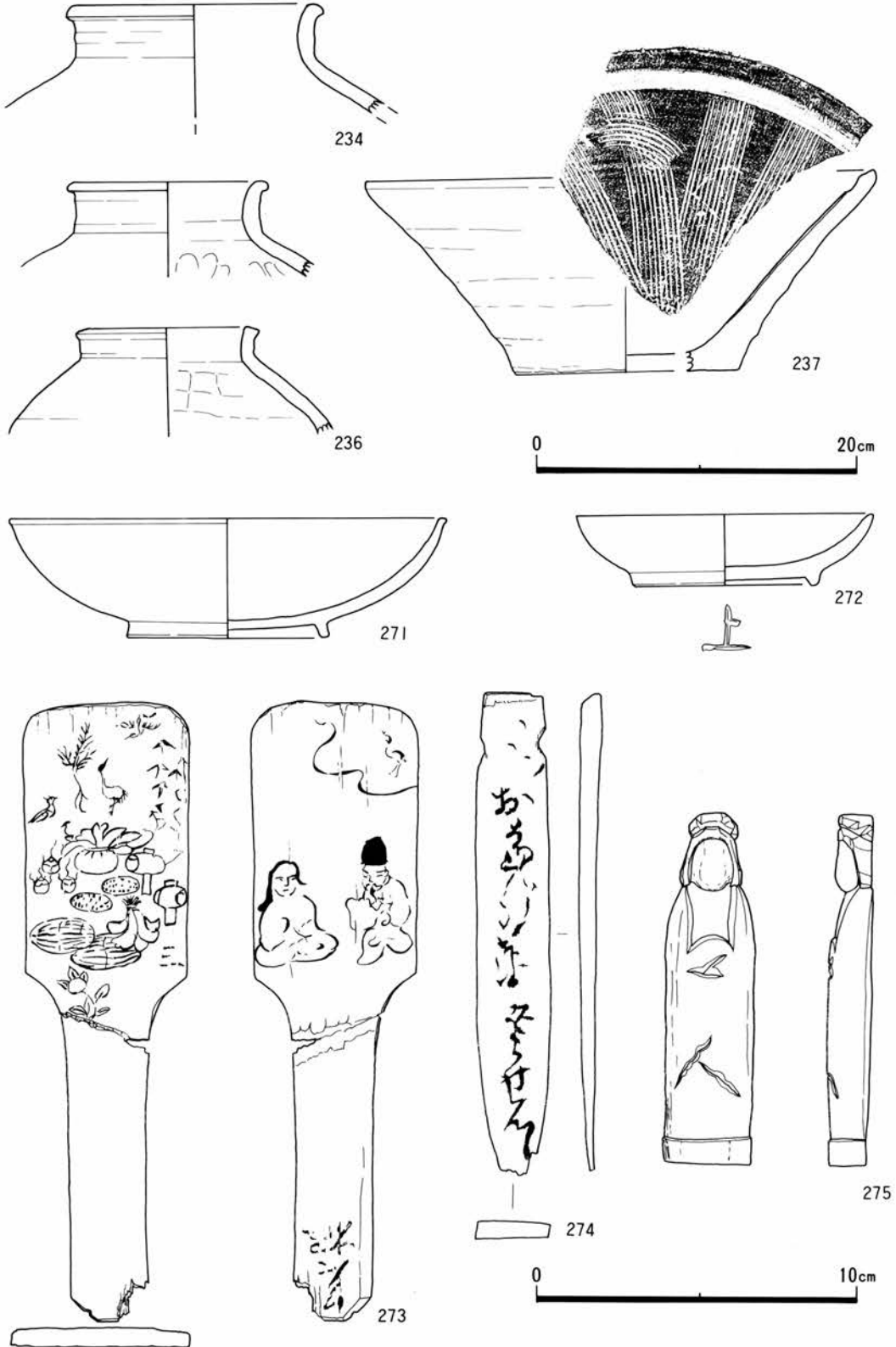
区画52-8 グループII・III 51~53. 天目茶碗 54. 鉄釉皿 57・58. 灰釉皿 65. 青磁碗
66. 青磁皿 68. 青磁香炉 71. 白磁杯 74・77. 染付皿 78. 錠前 79. 鉞 80. 銅錘
82. 鈴 83. 紅皿 86. 小札 88・89. 下駄



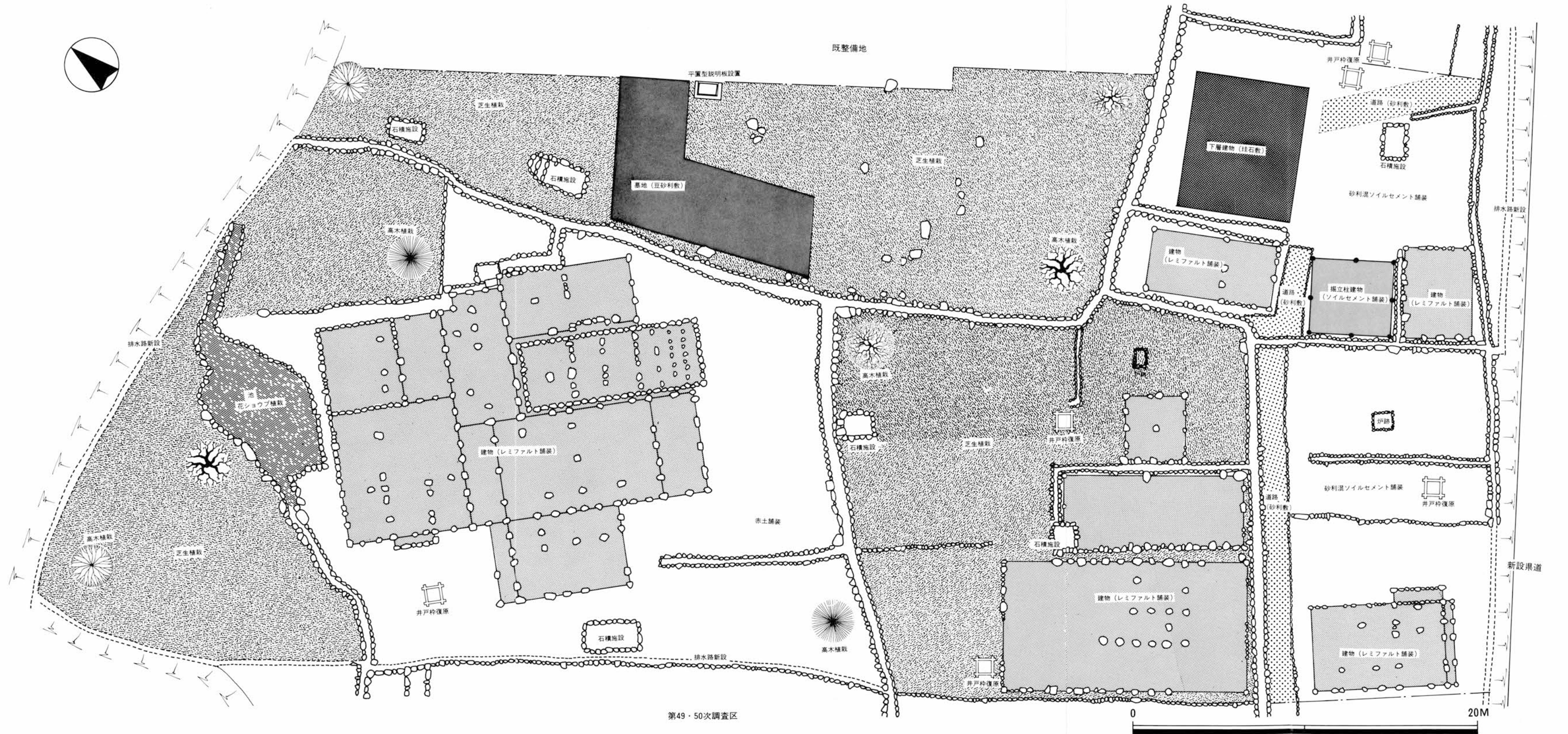
区画52-7 グループ I・II 91・92. 越前甕 93. 越前壺 100. 鉄釉小壺 105. 灰釉皿
114. 青磁碗 119. 青磁皿 234. 越前壺



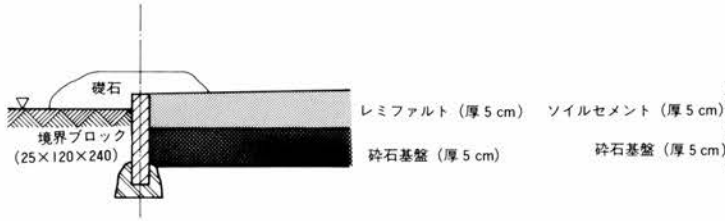
区画52-7の備蓄銭の一部



区画52-1~6 グループI 294~236. 越前壺 237. 越前播鉢 271・272. 漆皿 273. 杓子 274. 付札 275. 木製仏像

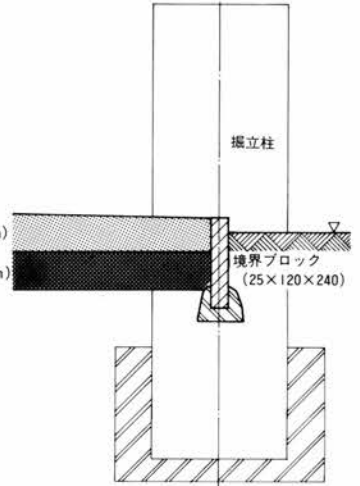


第20図

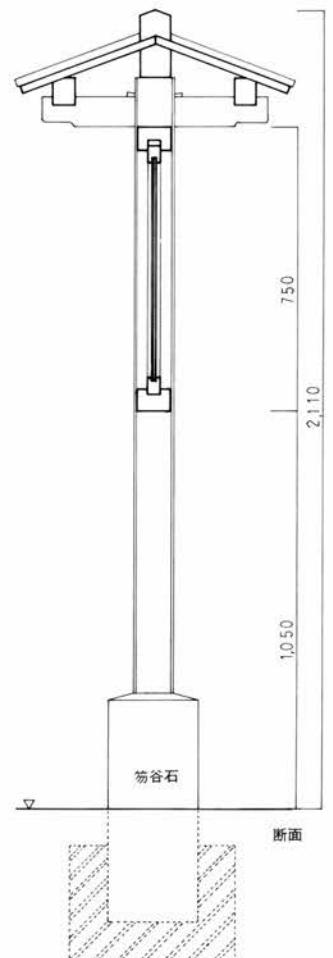
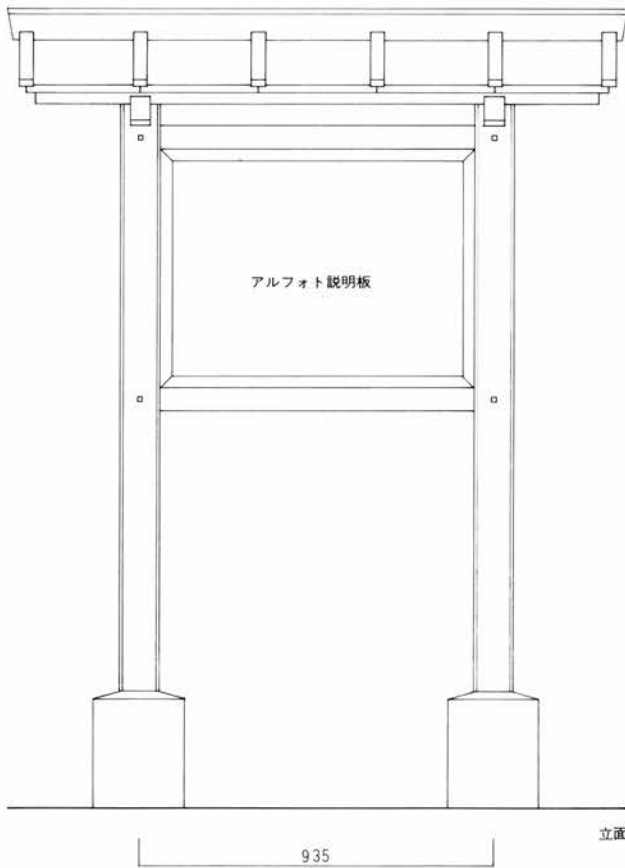


レミファルト舗装 (1/10)

第46次調査区整備工 (1)

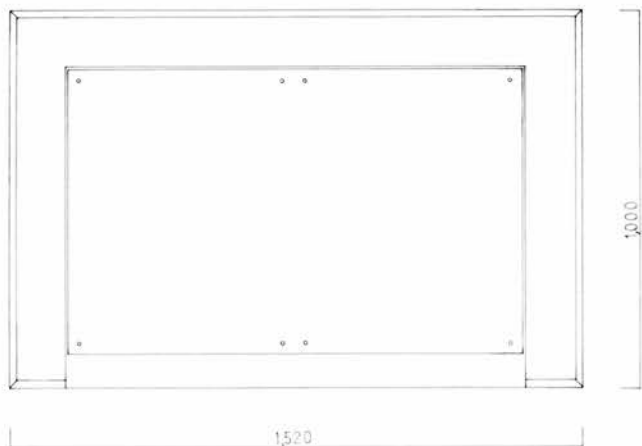


ソイルセメント舗装 (1/10)

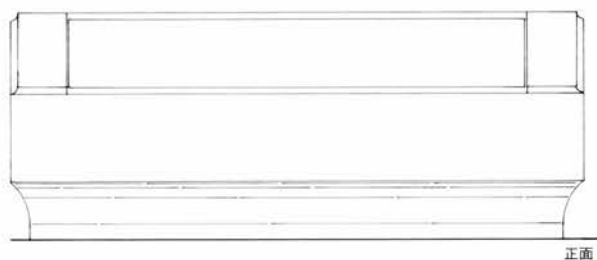


立置型説明板 (1/20)

第21図

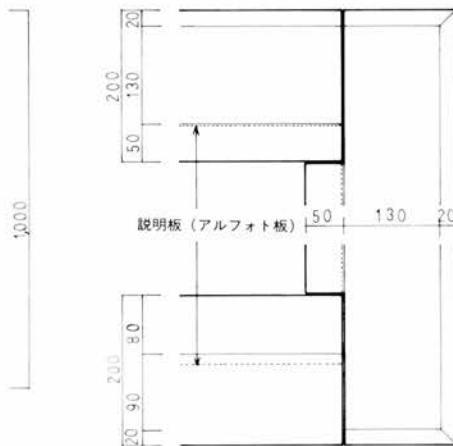


平面図 (1/20)

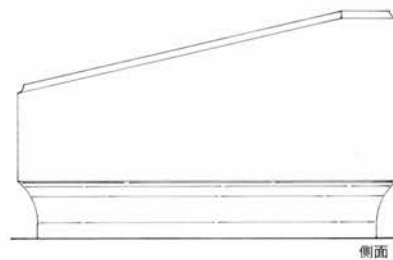


正面

第46次調査区整備工 (2)

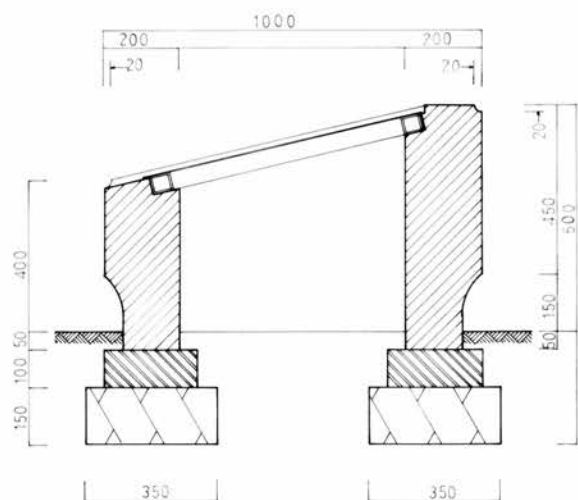


平面詳細図 (1/10)

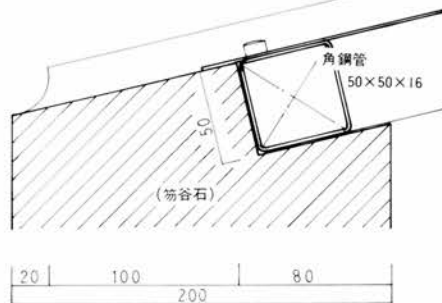
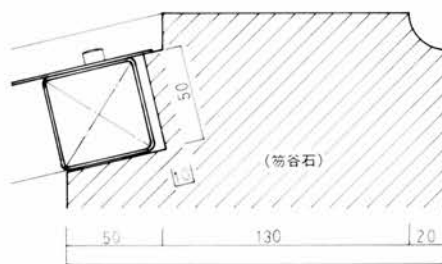


側面

立面図 (1/20)



断面図 (1/20)



断面詳細図 (1/4)

平置型説明板

特別史跡 一 乗谷朝倉氏遺跡 XVII

— 昭和60年度発掘調査整備事業概報 —

昭和61年3月31日

編集発行 福井県立朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社

無断転載を禁ず